

諒闇日本紀にみもの
おもひとよめり嘉祥
三年三月廿一日に仁
明天皇崩御なり

よみ人志らず
あし引の山べに今ハすみぞめの衣のそでのひる時もな
し

○私モモウハヤ只今ハ御聞及ビノ通り山ニ住ハヨメマシテ。泣テバツカ
リナリマスレバ服ノ袖ノカハキマスヒマモゴザリマセヌ

諒闇のとし池のほとりの花を見てよめる

たかむらの朝臣

水の面よまづく花の色さやうにも君がみかけのおもほ
ゆる哉

○アノ池ノ水ヘウツ、タ花ノ影ノハツキリト見エルヤウニ崩御ナツタ君
ノ御顔ガアリトマアオガムヤウニ思ハル、コカナ
しづくの。物の水の中に見ゆるとあり。万葉に多し。その歌をも考
へて知るべし。然るをあるひに沈浮ありといひ。或は沈みありといふ。

仁明天皇なり

みまひがとあり。万葉にまれに。沈シヅとかけるところのあるは借りてか
ける字あり。たゞ沈シヅとをしづくといへるとあり。

深草のみかどの御國忌の日よめる

文屋やすひで

草ふかき霞のたに、影かくして日ひのくれしけふにや
はあらぬ

○サイチウト照ル日中ノ日ガ深イ霞ニカシレテニハカニ闇ウナツタ
ヤウニ先帝様ハマダサカリノ御年ミトシデ俄ニ崩御ナツテ草ノフカイ深草山
ノ谷ヘチサメ奉ツタガホドナシ御一周忌ニナツテ今日ハソノ去年ノ御
崩御ノ日デハナイカイマア、ソノ時ハ悲シイウデアツタガ。去年ノ
ケフデアツタト思ヘバ又ソノ時ノヤウニ思ハレテ。サチモくカナン
イコチヤ

深草のみかどの御時に藏人頭にてよるひるなれ

藏人頭ハ段上を管領
して宮中にてハハ

んかたなき官なり枕
の草子にめでたき物
の中に職人を云へり

こけの袂ハ羅薛の衣
なり隠者の服なり

拾芥抄云河原院ノ六
時坊門南万里小路東
八町云々

つかうまつりけるを諒闇になりければさらに
世にもまをらさずしてひえの山にのほりてかしら
おろしてけりうのまたのとらみな人御ぶくぬぎ
てあるハかうふりたまはりなどよろこびけるを
聞てよめる

僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせ
よ

○世間ノ人ハミナ此ノ節ハモハヤ御服チヌイデ花ヤカナ衣ニナツタヤ
ガ。我ハツンナ花ノ衣ドコロデハナイ。マダ今ニ涙チコボシテ泣テバツ
カリ居レバ。セメテハ此ノ涙ニヌレタ昔ノ衣ノ袖ヨ。カワキナリヒセ
イキ。人ハミナ花ノ衣ニサヘナツタヤニ

河原のおほいまうち君のみまかりて秋かの家の
あたりをまかりけるに紅葉の色まだ深くもあら

ざりけるを見てかの家によみていれたりける

近院、右のおほいまうち君

打つけにさびしくもあるかもみぢ葉もぬしなき宿は色
なりりけり

○亭主ガナクナラレタレバ。庭ノ紅葉サハホツコリトシタ色がナイワイ
ソレユエコノ。紅葉チ見タレバニハカニマアドウヤラ。此ノ屋敷ガサビ
シウ思ハル、コカナ

藤原たかつねの朝臣のみまかりての又のとの
夏ほとゝぎすの鳴けるをきよてよめる

つらゆき

時鳥けさなく聲におどろけバ君にわかれしときぞあり
ける

○ケサ郭公ノナク聲ニピツクリシテ目ガサメテ思ラテ見レバ。ア、モウ

時鳥ガナケバ。去年君ニハナレタ時節デオチヤルワイ

櫻をうゑてありけるにやうやく花さきぬべき時
にかのうゑける人身まかりにけれバその花を見
てよめる
きのもちゆき

朗詠に
朝がほを何はかなし
と思ふらん人もも花
ハさころ見るらめ

○櫻花ハキツウ早ウチツテハカナイ物ヂヤガ。ソレヨリサキハウエメ人
ガハカナウナツタワイ。ア、無常十世ノ中ヂヤ。花ト人トドテラガサ
キハアダニナツテ戀シウアラウト思フタヅ。此ノヤウニ花ヨリサキハウ
エタ人ガアダニナツテ。戀シカラウトハサラ〜夢ニモ思ハナンダコ
トヂヤ

あるとみまかりよける人の家の梅花を見てよめ
る

色のかさといこれ
紅梅なるべし

つらゆき

色もかもむかしのこさに、ほへども植けん人の影ぞ戀
しき

○此ノ梅ノ花ヲ見レバ。色モ香モマヘカタノ濃サニカハラズ同シヤウニ。
咲テ見ゴトナケレ也。今年ハウエヌ亭主ガ居ラレヌエ。此ノ花ヲ見ル
ニツケテモ。ウエテヒサウシラレタ亭主ノ面影ガ戀シイ

河原の左のおほいまち君のみまかりて後かの家
よまかりて有けるにまほがまといふどころのさ
まをつくれりけるを見てよめる

君まさでけふり絶に塩がまのうらさびしくも見はわ
たるかな

○君ノゴザナサレヌデ。鹽モヤカチバ。烟ノタエテシマウタ此ノシホガマ
ノ浦ハカウ見ワタシタトコロガマア。物カナシウサビシウ見エルヲカ

菅家文學に大臣薨じ
給へりし又の年河原
院ハヤけたるよし見
えたり
心さびしきに浦さび
しをよせたり

父のありけんハ友則
の父の世に侍りけん

ナ

ふちはらのとじもとの朝臣の右近中將にてすみ
侍けるごうしの身まかりて後人もすまらずになり
にけるに秋の夜ふけて物よりまうできけるついで
に見いれければもどありとせんざいいと志け
くあれたりけるを見てはまへかたやくそこよ侍けれハむ
りーきおもひやりてよみける

みはるのありすけ

君がうゑし一むらすゝき虫の音の志けきのへとも成なに
ける哉

○君ノウエテオカセテレタ。タツタームラノ薄ガ。シゲウナツテ。虫ノ
シゲウナク野にマアナツタワイ。サテくケシカラヌアレヤウカナ
これたかのみこのちゝの侍りけん時によありけ

時なりある抄に友則
が父ハありつねなり
といへりもの、見え
たる事にヤ有常ハ推
高の皇子のをちにて
またしく参りたる人
なればさもあるべく
おぼゆ

いせの集に志での山
こえてやきつるほど
とびすこひしき人の
うへかたらなん

ん歌ぞもどこひければかきておくりけるおくに
よみてかけりける とものり

こどならハ言の葉さへもきえならん見れば涙なみだのたきま
さりけり

○我父ハトテモ死ナル、ナラバ。ヨンデオカレタ歌マデモ。ミナイツシヨ
ニイツン消テシマヘバヨイニ。ナマナカニ此こ歌ガ残ッテアツテ。跡あとデ
見レバ。一シホ思ヒマサレテ。イヨくカナシサガマスワイ

題志らす

よみ人志らす

なき人のやどにかよハとき時鳥かけてねにのみなくとつ
けなん

○時鳥ハ死シンダ人ノ居ル所ヘカヨウ鳥デヤト云トチヤガ。イヨくサウ
ナラバコリヤ。時鳥ヨオレガ。シヤウヂウ思フテ泣テバッカリ居ルト云
フトチ。アチハシラシテクレカシ。又かけてはハイヒダシテ

式部卿のみこはある
人云く、皇太子ハ二
島城に王なり、多
天皇の王なり世に
玉光と云ふと申す好
色は、世の美男にてま
しませしとをり

たれみよと花さけるらん 白雲のたつ野とはやくなり
しものを

○此家ノ此花ハ。タレニ見ヨトテ咲クヤラ。亭主ハ死ナレテ。此庭
ハモハヤ今デハ里遠イ野ノヤウニナツテシマウク物チ。花ガ咲タトテ
タレガ見ヤウヅ。打聞に。三四の句を火葬のけぶりによせたりとある
ハ。わろし。

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるを
いくばくもあらで女女のみこのみまかりにける時に
かのみこのすみける帳のかたびらのひもにふみ
をゆひつけたりけるをとりて見ればむかしの手
にてこの歌をなんかきつけたりける

かずくに我をわすれぬものならば山の霞をあはれと
はみよ

小町集に
ハかなくて雲となり
ぬるものならバかす
まんろちをぢハれと
ハ見よ

六帖に三の句われよ
りハとあり

○御深切ニ思召テワタシガチ御忘レ下サレヌモノナラバ。山ヘタチマ
ス。霞チアハレトハ思召テゴラウシテ下サリマセ。山 霞ガワタシガ烟
ニナリマシタ跡ノユカリデ。ゴザリマヌルホドニ。打聞かずくにの注
わろし。

をどこの人の國にまかりけるに女にはかよやま
ひをしいとよわくなりける時にみおきて身
まかりにける 　　よみ人志らす

こゑをたに聞きかでわかるゝたまよりもなき床とこにねん君ぞ
悲しき

○退付京ハ御カハリナサツタラワタシハモウ今度死ンデシマウテ居モセ
ヌ床ハオヒリサビシウ御寝ナルデアラウト存シマヌレバチマヘノ御聲
チサヘエキカズニワカレテ死ニマヌルアヲシガ魄ヨリモ。オマヘガワ
シヤオイトシイ

病やまひのなやむを
体たにいひつらふ
何事なにごとにもおぼしき
とに云いて身みのいた
みをおぼるに云いふ

拾遺集にやまひして
人多くなくなりし年
なき人を野らやぶな
どにおき侍るを見て
すけきに
みな人の命を路にた
とふるの草むらごと
におけはなりけり

やまひにわつらひ侍ける秋こゝちのたのもしけ
なくおほへければよみて人のもとにつかはしけ
る

大江千里

もみち葉を風にまかせて見るよりもはかなき物ハ命な
りけり

○紅葉ヲ風ノフクナリニシテオイト見ルヨリモマダハカナイ。物ハワシ
ガ命デゴザルワイ。モウ〜カウヤス今モシレマセヌ

みまわりなんとてよめる

藤原これもと

露をなごめだなる物と思ひけんわが身も草におおぬば
かりき

○ヒゴロ露チハカナイ初チヤトハ。ナセ思フタコヤラ。ハカナイノハ露バ

やまひしてよわくなりければ

なりひらの朝臣

つひにゆく道とハかねて聞しかど昨日きのうけふとハおもは
ざりしを

○死しンデニク道みちハタレデモイツつひツハセヒニユク道みちサヤト云いフハ。カチ

〜聞きテ居ゐテ。ヨウガテンシテ居ゐタケレドモ。ソレデモ此こゝ、ヤウニモウ

今日けふカ明日あしたユカウトハ思おもハナンダニ。ハヤ時節ときふしガキタツテ死しナチバ
ナラヌトカヤ千秋云。この歌。佛などのさとりがましき意にへつらひすして。おもふ心
のありのまに。よみ出られたるもの。いとよくあはれふかく。たふさきと
を味ふべし。これが皇國のいにしへ
の意にて。人の眞まことをまなりける

かひの國にあひまりて侍ける人とふらはんとて

かねてハ藤兼等の字
を万葉に書たり
元慶四年五月廿八日
年五十六にて卒すと
三代實録に見えたり

往反の道といふを甲斐路によせてよめり

まかりにける道なかにてはかにやまひをとして
いまくどなりににければよみて京にもてまかり
て母に見せよといひて人につけ侍りける歌
ありはらのまげはる

かりうめの行かひちとぞ思ひこと今いかどでのかさり
なりけり

○甲斐ノ國へ參ル此ノ旅チ。ツイカリソメナ往來チヤトサ。存シテ。出テ參
リマシタガ。ソノ時ガモハヤコノ世ノイトマゴヒノ門出テゴザリマシ
タワイナ

書頭古今和歌集遠鏡卷之十六終

書頭古今和歌集遠鏡卷之十七

雜歌上

題志らず

よみ人志らず

わがうへに露ぞおくなる天の川と渡る舟のかいのまづ
くか

○ワシガウヘ、コレ空カラ露ガフツテクルハ。コレハナンデモ天ノ川ノ
渡シ船ノカイノ車デアラウカイ

思ふどち圓居せるよハからにじきた、まくをしき物に
ぞありける

○カウ心ノアノタドウシ。ウチヨツテ居ル夜ハ目タツテイヌルノガノコ
リオホイモノデゴザルワイ

うれしきをなに、つゝまんから衣袂ゆたかにたてとい

この歌のつゞきはみなよるこび有ル歌のたぐひなるをうの始に出せるをもて思へばこは七月七日の夕べおもひがけす内宴めされて録など賜はりし人の御めぐみのかゝれるをかくはよせたるにや

ゆたかはひろく大なるこゝろなり

六帖にはかたみの歌
として君がたみと
みえたり

はまじき

○此、マアウレシイノチ何ニツ、マウツ。此ヤウナ嬉シイ、ガアラウトシ
ツ、タラ。キルモ、袖チマソツト。ユツソリトタテト云ハウデアツタ
モノチ。此キツイウレシサガコンナセバイ袖ヘハ中なかツ、マンル、デ
ハナイ

あざりなき君がためにとをる花の時しもわかぬ物にぞ
ありける

○御命ノカギリモナイ君ニ御目ニカケウト存ジテ折リマスル花ハカヤウ
ニイツト云フ時節ノワカナモナシニ咲クモノデ、ゴザリマスワイ君ノ御
命ガ限リモナイユエニ花モ時節ノカギリナシニイツマデモ咲クデ、ゴザ
リマス

ある人のいはく此歌はさきのおほいまうちごみのあり
いふ三字おち
たるなるべし
千秋云。こはさき
の、下におほさき

見ながらのみならず
らの畧なり此歌より
して紫のひと本ゆる
ともむらさきのゆか
りともよむなり
めは紫平の妻なりお
とうとはらの妹なり

ある注に寛平六年五
月五日權中納言從三
位

なりひらの朝臣

紫の一本故にむさし野の草のみながらあはれとぞ見る
○武藏野ハ一本ノ紫チアハレニ思フ故ニその縁デ同シムサシ野中ノ草ガ
ミナノコラズアハレニ思ハレル
妻の妹を
妻にもつて居る人に
めのおとうとをもちて侍ける人にうへのきぬをお
くるとてよみてやりける

むらさきの色ときどきいめもはるよ野なる草木ぞ分れ
ざりけり

○拙者が妻チ大切ニ存スレバソノユカリノ人ハ誰レデモミナ、妻同前ニワ
ケハメテナシニ大切ニ存スルワイ

大納言ふちはらのくにつねの朝臣宰相より中納
言になりける時にそめぬうへのあやをおくると
てよめる
近院、右のおほいまうち君

やまは彌生の義にて
木などいやかさなり
ておふる所を云ふ
墓にのみいよはあや
まりなり

大原野の春日の社は
藤氏の祖神なり

いせ物がたりのつく
ことこそ宗として今
を説はひがとなり
の外さまくの説あ
れどみなとるにた
す

こは宮中なれば天上
のよにたとへてい
り

いろなごと人や見るらん昔よりふかき心に染てし物を

○コレハ白ノ綾ナレバ。ナンニモ色ガナウテ。奥ノナイヤウニ。思ハシ
ヤルデガナゴザラウ。吾ハトウカラ貴様ヘキツウ深ウ心サシテ濃ウ染
テオイタ綾デゴザルモノチ

いろのかみのなみまつがみやづかへもせでいろの
かみといふところにもり侍けるをにはかにかう
ふりたまはれりければよろこびいひつかはすとて
よみてつかはしける ふるのいまみち

日のひかりやぶしわかねいろうのかみふりにし里に花
も咲けり

○御上ノ御メグミハドユマデモユキワタツテテウド日ノ光ノドノヤウナ
アレタ所デモワケヘタテナシニ御照シナサル、通りナレバ。久シウ引
籠ツテゴサツテ御沙汰モナカッタ貴様モ此ノ度ケツカウニ仰付ラレテ。

マコトニ花ガ咲マシタワイ。マツ目出度ウゴザル

二條のきさきの東宮のみやすん所と申ける時に
ほはら野にまうで給ひける日よめる

なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふころハ神代のもおもひ出ら
め

○カヤウニ御子孫藤原氏ノ御息所ノ東宮ノ御母儀トシテ御參詣ノアルナ
レバ。此ノ大原野ノ御神モ。カノ神代ニ天照大神ノ此ノ神ヘ勅定ノアラ
セラレタ御事モ今日コソ思召シ出サレテ御満足ニ思召ヌデコザラウ。
此ノ歌の説打聞よろし。

五節のまひ姫を見てよめる

よしみねのむねさだ

天つ風雲の通ひぢふきとぢよきとめの姿まはしとめ

五節はてゝのあくる
あしたにこのものゝ
落たるをひろひたる
なり

ん

○アノ天女ノ舞ノスガタガ。キツウ面白イコテ残りオホイニ。空ヲフク風
ヨ。アノ天女ガ雲ノ中ヲ通りテ天ヘイヌル道ヲ吹トヂテイナレヌヤウ
ニシテクレイソシタラモウシバラシ留メテオイト。マソツトアノ舞ヲ
見ヤウニ。條材に風雲をもにうさたる物あれば云々の説はくだくし。
五節のあしたにかざしの玉の落たりけるを見てた
がならんとふらひてよめる

河原の左のおほいまうち君

ぬしや誰とゞざら玉いはなくにさらばなべてやあは
れと思はん

○此ノ玉ノ主ハタレヤトトヘ用ミナワシヤシラヌ〜ト云テ。タレモワ
シガノヂヤト云モノモナシ誰ガノヂヤト云モノモナイニ。ソシナラタ
ノ舞姫チバ誰ト云フナシニ惣クフアハレイトシヤト思フテヤロカイ

上にさふらふは陸上
人なり大御酒は酒の
古酒をさとうくろ酒
白酒をさいふにおも
へ

こよろぎは相模の國
の名所なり
玉だれの小藤玉だれ
の越の大野なとも玉
藤の緒とつづけたる
冠群なり

上句又主ハ誰レヤト玉ニトヘドモイハヌニ

寛平ノ御時にうへのさふらひに侍けるをのこども
酒がめかめをもたせてささいのみやの御方におほみき
のおさかりを下されませと申にやつたれば
のおろしとさきこねに奉りたりけるをくら人ども
うのかめを見て
わらひてかめをおまへにもていで〜ともかくも
いはすなりにければつかひのかへりきてさなん
ありつるといひければくらう人の中におくりけ
る
とささきの朝臣

玉だれのふかめやいづくてよろぎの磯の浪わけおきに
出にけり

○サキノ小龜ハドコハタイツ。催楽ニ玉ダレノ小瓶チ中ニスエテ着求
メニコヨロキノ磯ニトアルガ。コチノ小龜モコヨロキノ磯ノ浪チ分テ
沖へ出タリ。御前へ。玉だれの小がめ諸説みまわろし。打聞よろし。

後撰にすがたあやし
と人のわらひければ
みつねせの海のつり
のうけなるさまなれ
どふかき心づるこに
しづめる

この時夏なるべし

千秋云。留りのけりは。けんをうつし誤れる
にやと。田中道まろがいへるさまあるべし

女ごもの見てわらひければよめる

けんげいほうし

かたちこころみやまがくれの朽木なれ心ハ花になさばな
りなん

○女中タチタツメニウシヲ。笑ハシヤルガ。コノ通り形コソ深山ガオソ
ノ朽木ノヤウナレワシモ花ニセウナラ。心ハ花ニモナラウツサ

りたゝがへに人の家にまかりけるときにあると
のきぬをきせたりけるをあしたにかへすとてよ
みける
きのごものり

蟬のはのよるの衣ハうすけれでうつりかこくもにほひ
ぬる哉

○ユフハオカリ申シタ此衣ハ時節ナレバウスウハゴザルケレ也。ウツリ

カハサテモマア濃ウニホヒマスルヲカナ。オタシナミノホド感心致シ
タ。餘材わろし。打聞よろし。

題まらさず

よみ人まらさず

おろくいづる月にもある哉あし引の山のあなたも惜む
べくなり

○サテモくマアオソウ出ル月デゴザルヲカナ。コレハナソデモ。コチ
ラデ此ノヤウニ待ツトホリニアノ東ナ山ノアチラデモ。山へ入ルノチ
人が皆惜ムト見エマスソレデコチラへ出テコスデアラウ

わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月
を見て

○今夜此ノチバステ山デ月ヲ見レバサテくサヤカナ月デ見テ居レバド
コトモナウ物カナシウナツテキテ。ウシハドウモ心ガハラサレヌ

此ノ歌。をばすてといふ。山の名にかはるとにあらさず。又所がらに

近級は信濃ノ國近級
郡に近級郷ありうこ
にある山なるべし大
和ものがたりにもこ
の山に妖をすておき
てかへるとて甥がよ
めういふうたあるは
この歌をとりてつた
なき作物語なり

もかゝはらず。所はいつこにても同。事にて。歌の意はたい。月見ればちい物こそかあしけれ。あざいへるたぐひあるを。たま〜をばすて山にて見たる時によめるのみあり

なりひらの朝臣

大かたの月をもめでしこれぞこのつもれば人の老となるもの

○ダイガイナナラモウ月モアマリ。賞翫スマイヅ。コノ見ル月ガ。アノ
ダン〜トツモレバ。人ノ年ソヨル月ノ年月チヤ

すべてこれぞこのといふ詞は。俗語にコレガアノ云々チヤといふ意あり。このはかの、意あり。この外にも雅言には。かのといふべきを。このといへる例多し。打聞に。初句。大かたのとある本をとりて。はつちをきよとあるはいぢい

月おもしろしとて凡河内、躬恒がまうできたりけ

上にも時鳥汝がなく
里のあまたあれば猶
うとまれぬ思ふもの
かり

秋あきにおももと思ひし
菊を大おほのとよめる
に同じ心なり

るによめる

絶つらゆき

かつ見れどうとくもある哉月影のいたらぬ里もあらじ
と思へば

○月ハカウシテ見テ居ツタモマア。ウトくシウ思ハル、イガ。コノバ
カリデハナシニ。ドコヘモカシコヘモ影ノエカヌ里モアルマイト存ズ
レバオ貴様モソナモノカシラヌ千秋云。はじぬ二句。見れどかつうとくもある哉
の意にて。かつは見るとうとまきと一つにまじれ
るにおきた
る詞なり

池に月の見にけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみな底そこに山やまのはならでいつる
日かけ

月ニフタツハナイモノデ。山ノハデナケレバ出ヌモノヂヤト思フタユ。
アレ山ノハデナイアノ池ノ水底みづのそこヘモ出タコレデハニツモアルモノト見
エル

みをとほ水のはやく
ながれるを云

これは又山の西のあ
なたをおもひやると
て上の遠くいづる月
にもある哉をうちか
へしたるなり

題志らず

よみ人志らず

天あまの川雲のみをにてはやけれバひかりとゞめず月ぞな
がるゝ

○天ノ川ハ雲ノ水スデテ瀬ガ早イニヨツテ。月ノ光ガ。シバラクモ留ラ
ズニ早ウ流レテユツ

あかずして月のかくるゝ山もどいあなたおもてぞこひ
しかりける

○マヌ見タラヌノニ月ノカクレルツノ山ノフモトテ見テ居レバ月ノ入ル
アノ山ノアチラウラヘ行テ。又見タイワイ

これたかのみこのかりしけるともにまかりてや
どりにかへりて夜ひとよ酒のみ物語をしけるに
十一日の月もかくれなんとまけるをりにみこゑ
ひてうちへいりなんとまければよみ侍ける

土佐日記になり平の
君の山のはにけて入
すもあらなんと云フ
歌おほゆもし海へに
てよまうしかは波立
さけて入すもあらな
んとよみなまし云々

なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝハ山のはにけて入れ
ずもあらなん

○アノ月ハマ見タラヌニキツウ早ウマアカクレルヲカナ。アノ月ノ隠レ
ル山ガ。ツキヘニゲテイソデ。月ヲ入テクレチバヨイニ。カウ云フノハ
月ノフバカリテヤナイツエ

田村のみかどの御時に齋院に侍けるあきらさい
このみこきは、あやまちありといひて齋院をか
へられんとしけるをうの事やみにければよめる

あま敬信

大ぞらをてり行月し清ければ雲かくせどもひかりけな
くに

○空ヲ照テユク月ガ清イニヨツテ。ナンホ雲ガカクシテモドウシテモ光

ハキエハセヌハサテ

題志らず

よみ人志らず

いろのうみは布留を
いふ冠鮮なりふるか
ち小野は大和のふる
の小野の枯野ならを

いろのかみふるからをのゝ本がしほもとの心ハわすら
れなくに

○国モトカラノ心ハナンボウデモ。ワスレラレヌモノヂヤ

いにしへの野中の志みづぬるけれど本の心を志る人ぞ
くむ

○ムカシキツイ。ケツカウナ。清水ヂヤト云テ。名ノ高カッタ野中ノ清水
ハ今ハモウナマヌルウナツテアルケレドモ。ソレデモ昔ノコチ知テ居
ル人ハ。今デモ汲デノミマス

いにしへまづのさだまきいやとまきもよきもごかりハ有
し物なり

○国ヨイ衆バカリデハナイ。我ラガヤウナ。賤シイ者デモ一度ハ男ザカ

いにしへのまきとは
神代にはじまりし倭
五布をいふ

ある説に才能ありな
がら世にゆるされて
用おられぬ人の述懐
せる歌なりと云ふは
歌のおもてに見えぬ
つけろへことなり

さかりはもは盛はと
云入てなげくこと
ハ例のうへて助けた
るなり

リハアツタモノヂヤ

今こそあれ我もむかしいさをとこ山さかりゆく時も有こ
し物を

○今コソ此ヤウニ年モヨツテピンボウチヌ。レオレモ昔ハイツカドノ男
デ。繁昌ニツランタ時節モアツテキタモノチ。アノツチチシイコトヂヤ
世中にふりぬる物ハ津の國のながらのはしと我となり
けり

○ナンドモフルウナツテオトロヘタノジトヘニハ津ノ國ノ長柄ノ橋ト
云チヤガ。世中ニフルウナツテシマウタ物ハ其ノ長柄ノ橋トオレト。
チヤウイ

さノ葉にふりつむ雪のかれおもみ本くだち行わかざ
かりはも

○篠ノ葉へ雪ガツモツテ。末ガオモサニ。本ノ方ガカクムイテユクヤウニ。

ある人大あうぎの森
を山城といへるおぼ
つかなし

オレモ此ヤウニダシク年ガヨツテ。衰ヘテユクガ。昔男ザカリノ時節
ハマア。イツノイテアツタツイ。ハマ、

大あらぎの森の下草かいぬればこまもすさめずかる人
もなし

○大荒木ノ森ノ草モ。キツウタケテカラハ馬モ喰^{くひ}タガラズ。荊^{かろ}ル人モナイ
ガ。人モツンナモノヂヤ。年ガヨツテカラハ。誰デモキラウテヨリツ
カヌワイ

又ハこくらあさのきふの下草かいしぬれば
かぞふればとまらぬものきととといひとしいいたくお
いぞまにける

○シバラクモトマラズニ早ウ過テユク年チア、早ウタツタ〜ト云テハ
過ギ云テハ過ギシテツノ年ノ數チカズヘテ見レバ。今年ハモウオレモ
キツウヨイ年ニキ。ナツタワイ

上の句はからくもといふ人辭のみにて序なり

若しくは若ると云詞を延ていへるなりちくを約むればるなるなり

初句は四の句の上につけて心得えし。餘材に上の三句引ついでよみて心得べしといへるは。誤あり。とまらぬ物とは早き物といふ意にて年のことあり。

おしてやる難波のみつにやく塩のからくも我の老にけるかな

○国ア、チンギナオレハマア。キツウ年カヨツタイカナ

又いおほどもみつのはまへに

おいらくのこんとせりせし門さとしてなごこたへてあはぶらまじを

○此老耄モノガ。來ウト云フチ。トウカラ。知ツタナラ。門チサシテオイテ。留守ヤヤト云テ。逢ズニ居ヤウデアツタモノチ

此三つのうたはむかしありけるみたりのおきさのよめるとまんとかごまに年もゆかなんどりもあへす過る齡やとものに

かへると

○月日ガドウヅマアサカサマニアトヘユケバヨイニ。ソシタラ。何ソノ
マアナウツイタツテユク。人間ノ年モソノ月日トイツモヨコ跡ヘモ
ドツテ。又若ウナルテアラウカト思ヘバサ

どりとむる物にしあらねバ年月をあらはれあなうと過じ
つる哉

○月日ノタツテユクノハトリトメラル、モノデナケレバ。ドウモセウ
ガナサニ。ア、ハレ早ウタツタ^五カナ。ア、ウイコトヤト云テタテ、ユ
クナヤ

どゞめあへずうづもどとひいはれけりまかもつれな
く過るよはひか

○トメウト思フテモドウモトラレイデ此^四ノヤウロマアサシムノニモラ
ヌカホデ心ツヨウスカ^一ト年^五ハ過テユク^一カヤ。トシト云ハレルノ

年^五に疾^四にひかけた
リ

ハモツトモナヲチヤワイ。トシト云ハ早イト云フコナレバ

打聞に。句をおきかへて。一四五二三と次第して心得べしとあり。よろし

かゞみ山いざ立よりて見てゆかんとしへぬる身のおいしぬると

○鏡山ト云山ナラ。人ノ影ガヨウウツルテアラウホドニ久シウナツタ此ノ身ハ年ガヨツタカト。ドレヤチヨツテ。見テユカウツ

この歌はある人のいはく大とものくろぬしのあり

なりひらの朝臣のはゝのみこ長岡にすみ侍ける
時になりひら宮つかへすとて時くもえまかりを
ふらはす侍ければ志はすばかりにはゝのみこの
もとよりとみのみとてふみをもてもうできたり
あけて見ればことばなくて有ける歌

かゞみ山はまになり

この注例のとられぬ
なるべし

母のみこは桓武天皇
の皇女伊登内親王な

り。
長岡は山城國乙訓郡
なり

老ぬれづらぬ別れもありとらばいよ〜見まくほ
とさ君哉

○世中ノナラヒデセヒトモノカシヌ別レモアルト云フナレバ年ヨッ
テハ殊ニ明日モシレチバ。イヨ〜君ニドウツ逢タイコカナ
上句二三一と次第して心得べし。

かへじ たりひらの朝臣

世の中にさらぬわかれのなくもがなちよもと歎く人の
子のため

○親の壽命ヲア、ドウツ千年モト願フ子ノタメニ世ノ中ニハドウツ通レヌ
別レト云フノナイヤウニシタイコカナ。千秋云。人の子といふは。親にむかへてた
子といふとなり。人のおやといふも。
たゝ親なり。これ
は語の例なり。

寛平の御時きさの宮の歌合の歌

ありはらのむねやぶ

なげくこゝにては願
ふところなり

上の句は序にてたゞ
かへす〜といふる
となり今の事にはか
へるがへると少し
聞わがたし

あはましものかはあ
はんものかあふまじ
となり

白雪の八重ふりまけるかへる山かへる〜もおいにけ
る哉

○オレガ頭あたまハマア雪ノイクヘモ〜。ツモツタヤウニマツ白ニナツチ。カ
ヘス〜モ。キツイ年ノヨリヤウカナ

おなじ御時うへのさふらひにてをのこのどもに
おほみさ給ひておほみ御時あうひありけるついでに
つかうまつれる としゆきの朝臣

おいぬとてなどか我身をせめきけん老ずばけふにあは
まし物を

○我身チ年ガヨツタト云テ。ナゼニフツシニ思ウタツ。今日思フテ見レ
バ。年ノヨツタハウレシイコヂヤ。カウ年ノヨルマテ生テ居ズハ。今日
ノヤウナ。アリガタイコトニアハウモノカイ。年ガヨツテ生テサレバ
ユツ。せめきの説。歌注わろし。

題志らず

よみ人志らず

ちのやぶる氏とついで
く冠辭にて氏を宇治
にとりなせり

ちのやぶる宇治のはし守なれをじぞあはれと思ふ年の
へぬれば

○曰宇治ノ橋守ヨホカノ人ヨリハ其ノ方チオレハ。フビシニ思フオレト
同シヤウ二年ヘタ老人ヂヤト思ヘバ

我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬら
ん

此ノ住ノ江ノ岸ノ松ドモハ。オレガ見キタツテモ。モウ久シウナルガ。ソレ
ヨリマヘ始メカラハイカホド年ヲ經タコヤラ。サダメテ。キツウ久シ
イコデアラウ

住よしの岸のひめ松人ならびいくよかへしとよまじ
ものを

○住吉ノ岸ノ姫松ガ人間ナラバ。イカホド年ヲ經タツト問テ見ヤウニ

梓弓は冠辭なり

梓弓いそべの小松たが世にかよろづ代かねて種をまき
けん

○曰此ノ磯ベノ松ハ最初ニタチチ。マツ時ニ定メテコレカラ後万年モオヒ
シケレト思フテ時テオイタデアラウガ。ソレハ昔イツノ代ニ誰ガマイ
タコヤラ。この小松はたゞ松あり。ちいさきをいふにはあらず。そのた
ゞ馬を駒といひ猪をぬのこ鹿を鹿子といへる例あり。これらの例みあ
古書に見ゆ。

この歌はある人いはく柿本人丸がなり

かくしつゝ世をやつくさん高砂の尾上にたてる松なら
なくに

○オレハ此ヤウ二年バツカリ。ヨツテ今マデ何一ッコレツト云テシダ
タコモナイガ。モウ此通りデー生ハテルデアラウカ。高イ山ノ上ニア
ル松コソ。何スルコモナシニ久シウアル物ナレオレハツノ松デモナイ

高砂ハ山の惣名にも
いへばこゝは播磨の
名所を云フと見えた
り

ニサ。千秋云わかき人のよく心得べきうたに有ける。

藤原、おきかせ

たれをかも志る人にせん高砂の松もむかしの友ならな
くに

○オレハ此ヤウニキツウ年ガヨツテ。今デハモウ同シコロアヒノ友モチ
カラナイガ。誰チマア相手ニセウツ山ノ上ヘノ松ガ年久シイ物ナレド、
ソレモ昔カラノ友デナケレバ。相手ニハナラヌ。モウ松ヨリ外ニオレガ
クラ井年ヘタモノハトントナイ。 餘材わろし。

よみ人志らず

わたつみのおきつ潮あひにうかぶ沫の消ぬものからよ
る方もなし

○オレハ海ノ沖ノシホアヒヘ浮ジ沫ノヤウナモノデ。消ズニハアリナガ
ラ。ドコヘモヨリツク所モナイ

上の句は消ぬものか
らといはん序なり
きえぬものからは消
ぬものながらなり

わたつみのかざしにさせる白たへの浪もてゆへるあは
ぢ島山

浪ノ白ウタツノハ。トツト花ノヤウニ見エルガ。ソレデアノ浪ハ。海ノ
神様ノ御ツムリノカザシヂヤトイノ。ソレニテノ淡路島チコレカラ見
レバアレマアソノマツ白ナ浪デ。グルリットトリマハシテ。テウド帯チ
シタヤウナ。サテモ見事ナ。ケシキチヤ

打聞わろし。かざしにさせるとは浪のとにてとあれ。又前後の説あは
す

わたの原よせくる浪のまばくも見まくのほしき玉つ
島かも

○此玉津島チ見レバ。浪ノウチヨセルヤウスナド。サテく面白イケシ
キカナ。ドウツ度くモ來テ見タイトコロチヤ。 千秋云。玉つ島は。三代實録に。
玉出島とかれ。うつば物が
たりには。玉あること
も有。つと濁るよし

上のけしきまひひて
即チ序のごとくしば
く見まほしとなり
まばくは俗に云か
さねくといふに同
じ

田袋島は津の國にあ
り雨衣は雲とつづく
冠辭なり

なにはがた志ほみちくらしあま衣たみの、島にたづ鳴
わたる

○ハアシホガミチテクルサウタ。難波ノ国タ、ノ、島ニ鶴ガトヒサワイ
テ鳴ク

貫之がいづみの國に侍ける時にやまとよりこえ
まうできてよみてつかはしける

藤原たぐみ

沖津の濱は和泉にて
出房のいたらぬしあ
たりの名所なるべし

君を思ひおきつの濱に鳴たづの尋ねくれはぞありとだ
にさく

○拙者ハ貴様ヲ思フテ忘レズニ此ノ邊マデ。目尋チテ參マシバコソ御無
事ナト云フナリトモ聞タレ。貴様ノ方カラトテハ。一向御尋チモ下サ
レヌ。サテ、キツイオオミカギリデゴザル
かへし
つらゆき

上は序にてうの國の
地名もていへり
待わたる久しくまつ
ころなり

おきつ浪たかしの濱のはま松の名にころ君を待渡りつ
れ

○□アノ高師ノ濱ノ松ノツノ松ト云フ名ノ通りニ。拙者ハトウカラ貴様
ヲ御待ヤシタワイノ

なにかにまかれりける時よめる

難波がたかふる玉藻をかりそめのあまとぞ我はなりぬ
べうなる

○難波ガタノ風景サテ、面白サニ。シバラク此ノ邊ニ逗留シテ當分玉藻
ヲ刈ル海士ニ。オレハナラウヤウニ思ハレル

あひ志れりける人の住吉にまうでけるによみて
つかはしける
みぶのたぐみ

住吉とあまいつぐともながわすれ人わすれ草おもふと
いふなり

六帖にあまはいふと
も又岸におふなりと
見えたり

○住吉ヘゴザツテモシソノ海士ハ住ヨイトコロテゴザルト云テキカス
凡必ズ長居ハシサツシヤルナヤ。住吉ハ在所ノ人ヲ忘レルト云。ワスレ
草ガハエテアルト云フヤホドニ

なにはへまかりける時たみの、島にて雨にあひ
てよめる
しらゆき

雨によりたみの、島をけふゆけば名にはかくれぬ物に
ぞ有ける

○雨ガフルニヨツテ。簀ト云フ名ヲ頼モシウ思フテ。此ノ難波ノ田簀ノ島
ヲ今日トホツテユケバ所ノ名ハ簀ナレド名ニハ身ガレヌモノテ雨フ
リノ間ニハアハヌ物デゴザルワイ

法皇西川におはしましたりける日つるすにたて
りといふを題にてよませ給ひける

あしたづのたてる河へを吹く風によせてかへらぬ浪か

西川は大お川なり

川づきを切つて火を
心得んし

とど見る

○川ノハタニ白イ鶴ノ立テキルヲウシハ。風ガフイテヨセタ浪ノカヘラ
ズニアルノカト見タ。千秋云。すべてあしたづとい。白き鶴をいへり。
芦の花の白きによれる名あり。萬葉にも白鶴とあり。さほかのれくは
しき考あり。

中務のみこの家の池に船をつくりておろまはじ
めてあうびける日法皇御らんじにおはしました
りけり夕さりつかたかへりおはしまさんとまけ
るをりによみてたてまつりける

伊勢

水のうへにうかべる船の君ならぶこゝぞとまりといは
まし物を

○君ガ水ノ上ニウイテアル船デアラセラレウナラ。ユ、ガ船ノ泊リマス

荷子ニ云フ君ヘ者舟也
庶人ハ者水也水能ク
載舟ヲ亦能ク覆ス舟
也といふをいへ
るものなり

トコロヲゴザリマスト申シ上ゲテ。ユヨヒハ御留メヤシマセウモノチ
千秋云。この歌上の句の意
此譯にていとよく聞えたり

からとといふところにてよめる

うせい法師

からとの泊は吉備の
國なり
六帖には浪の緒より
とあり

都までひゞきかよへるから琴ハ浪の緒すけて風をひき
ける

○京マテ聞エテ名ノトホツテアル唐琴ト云所チ來テ見レバ。風ガ吹ケバ
浪ガ立テ音ガスル。オレヤ此唐琴ハ。浪ハ糸チヌゲテ風ガ彈ノヂヤツイ
布引のたきよてよめる

在原行平朝臣

こきちらすたきのまら玉ひろひ置いて世のうき時の涙に
ぞ出る

○此瀧チ見レバ。水ノトシテ走ルノガテウヱ玉チ緒カラコキチラスヤウ

布引のたきは津の國
宇田川の上なり

ちらかハ歌哉なり

ナカ此玉チヒロウテオイト借リマス。ソシテワシガ身ノウヘノカヤウ
ニウイ此節ノ涙ニセウト存ズル

布ひきの瀧のもとにて人々あつまりて歌よみけ
る時によめる

なりひらの朝臣

ぬきみだる人ころあるらし白玉のまなくも散か袖のせ
ばきに

○此マアセバイ袖ヘツ、マレマセヌホド。玉ガマヒダナシニ。シヂウマ
アチツテクルコカナコレハナンデモツナヒテアル玉チ。誰たれグ緒チトイ
テ。ハラ〜ニシテコノ瀧ノ上、方カラチラス人ガアルサウナ
よしの、瀧を見てよめる

承均法師

誰ために引てさらせる布なれやよをへて見れどとる人
もたき

なれやハ布にちれや
なり

ある人云文徳寶錄に
嘉祥二年九月に雨を
いのちしめ給ふに時
に應じて雨ふるこの
日諸神のために七十
人を僧となし右神の
字を創らしめて名を
なさせ給ふとありて
の法師もその一人な
るべしと云ふ

○アノヒツハツテサラシテアル布ハ。誰ガキルモノニスル布チヤカ。ツ、
トマハカタカラ見ルガ。イツ見テモソノマ、デアツテ。トリイレル人
モナイ。瀧をすまはち布にしてよみたるあり。決まら三ともおまじ

題志らす

神たいた師

清瀧のせいのまら糸くりためて山分ごろもれりてま
しき

○此ノ清瀧川ノ瀨ニタツ浪ハトント白イ糸チヤ。コノ糸チクツチタン
トタメテ。山チアルク時ノ衣ヲ織テ着ヤウニ。清瀧ノ清イ糸ナレヤ出
家ノ山アルキノ衣ニヨカロウワサテ

龍門にまうで、瀧のもとにてよめる

いせ

たち縫ぬきぬきし人もなき物をなに山ひめの布さら
すらん

○タナモヌヒモセヌ衣チ着タト云フ昔ノ仙人モ今ハ居モセヌノニ。ナン
ノタメニ山姫ノアノヤウニ布チサラシナサルヲヤラ

朱雀院のみかど布引の瀧御らんせんとてふん月
のなぬかの日はしまして有ける時にさふらふ
人々に歌よませたまひけるによめる

たちばなのながもり

ぬじなくてさらせる布を柵機たなはたの我ころとやけふんか
さまし

○ヌシモナウテ。サラシテアルアノ布チ。オレガ物デハナケレドヌシガ
ナケレバオレガ心デ。タナバタニ借テ進ゼウカイ。今日ハ七夕しつせきチヤニ

ひなの山なるおどはのたきを見てよめる

たぐみね

おちたぎつ瀧のみななみ年つもり老にけらしな黒き筋くろきすぢ

うつほ物がたりに君
こよとみなかみしろ
くなる瀧は老のなみ
だのつもるなるべし

瀧を瀑布ともから人
のいへるをみてこ
はたに布と見て瀧
といはでまかせたり

なし

○タギツテ落ルアノ瀧ノミナカミガ。久シウナツテ。年ガヨツタサウナ
ソイナミナ白髪バツカリテ黒イ筋ハ一スデモナイ。カウ云ノハミナカ
ミチ髪ニシテチヤヅヘサウ聞エルカノ

おまじ瀬をよめる

みつね

風ふけどどころもさらぬ白雲はよきへて落る水にぞあ
りける

○雲ハ風ガフケバ段々ヨソヘウツヒテユク物ヂヤガ。風ガフイテモ同ジ
所チザラズニ。イツデモ同ジヤウニアルアノ白イ雲ト見エルノハ。昔カ
ラ落ル瀧ノ水デゴザルソイ

田村の御時に女ばうのさふらひにて御屏風の糸御
らんじげるに瀧おちたりけるところおもころしこ
れを題にて歌よめとさふらふ人におほせられけれ

女房の侍ひいたしは
ん所といふ主上の御
重なり後涼殿の東に
あり

ばよめる

三條の町

思ひせく心のうちのたぎなれやかつとハ見れど音のま
こにぬ

○人思ヒチコレエテ隠クシテ居リマスル心ノ内ハ瀧ノヤウニワキカヘリ
マスルモノデゴザリマスルガ。此瀧ノ瀧ハサヤウノ心ノ内ノ瀧ヂヤ致
シマシテ落ルトハ見エマスレド。チカラ音が聞エマセヌ

屏風の繪なる花をよめる

つらゆき

咲うめし時より後はうちはへて世ハ春なれや色のつね
なる

○咲ソメタ時カラシテハ。ウチツマイテ世ノ中ハイツ、モ春デヤカシテ
此花ハ色ガシヤウヂウオンナツフヂヤ

屏風の糸によみ合せてかきける

坂上これのり

花といはぬは絵にゆ
じるなりと云

三條の町は紐の靜子
と申て名虎の女なり

雁と雁をいへるは
給にさるなるべし

かりてほす山田のいぬのこきたれて泣なころ渡れ秋のう
けれバ

○オレハ秋ガツライニヨツテ目此ヤウニヒタクト涙チ流シテ泣テサ。
クラスワイ。 かりては。雁をとめて下句の縁とせり

頂古今和歌集遠鏡卷之十七終

古本にけふの瀬とな
るとあり

いよ、しもぢらじら
幾許の年もあらじと
云なり日本紀に万歳
をよろづよとよめる
にて知るべし

頂古今和歌集遠鏡卷之十八

雑歌下

題志らず

よみ人志らず

世の中ハ何かつねなるあすか川きのふの淵ぞけふの瀬
になる

○世の中デハ何かイツデモカハラヌモノデヤゾ。アノ飛鳥川チ見レバ。昨
日マデ淵デアツタ所ガ。今日ハモウ淺イ瀬ニナル。川サヘサウデヤ。
スヤレナンデモカハラヌ物ト云ハナイ

いくよ、もあらむ我身をなぞもかくあまのかるもに思
ひみたる、

○モウ生テ居ルアヒダモ何ホドモアルマイ。此身チ。海士ノ刈ル藻ノ。
亂レタヤウニナゼニオレハマア。此ヤウニドウカウトイロクニ苦勞

上の句ははれずといはん銀なり

六帖にまつなげかるゝとあり

京へのぼる人は甲斐の弁郎いづれの犬にても彼使使税帳使などの上なるべし

ニ思ウコゾ。モウワヅカノ間ナレヤ。ドウデモカウデモヨイコキヤニ雁のくる峰の朝霧はれずのみおもひつきせぬ世の中のうら

○國心ノハレル時モナシニ常任思ヒゴトノツキルト云フモナイ。コノ世中ノツラサワイノ

小野たかむらの朝臣

志かりとてそむかれなくも事とあれはまづ歎かれぬあなうよの中

○サウヂヤト云テ。ノガレラレモシス世ノ中ナヤニ。ナンヅト云フト。マヅア、ウイ世ノ中ヤト云テナゲカル、

かひのかみに侍けるとき京へまかりのほりける人よつかはしける　きのゝとだき

京へまかりのほり　あるを　間に誤るゝといひて。まうのほりも。改

行平のもしはたれつつといふ歌に合せ意得べし

三河ノ様にてくだるなり

められたるは。とはりはさるとみれども。中々に例はたがへり。その古にまづみて。此集のころの詞づかひを。おさまへられざるあり。哀傷部の詞書にも。京にもてまかりとあるをや。今、京にありての詞には。すべて京にまれぬあかにまれ。かまたてまたの境界上下にいかはらず。あるたへ行をまかるといひ。てまたへ来るをまうでといへる一種あり。例を考へわたして知るべし。常に多き詞り。

みやこ人いかにと間は山高みはれぬ雲にわぶどこたへよ

○モシ京ノ人ガ。ウシガコチ。ドウヂヤト云テナラ。山ガ高サニ。シヤウヂウ雲ノハレヌヤウニ心モハレヌ。遠イ國ニ義ニオモフテ居ルト云ッテ下サレ

ふんやのやすひでがみかはのぞうになりてあかた見にひいてたよといひやれりけるかへり

いなんさうおもふと
いひてゆかぬよし
をいはぬがよきふる
をよく味ふべし

万葉に事にこうふく
もだしくもとよめる
もほだしの古語なり
ふもたしをついでて
ほだしと云なり

ごごによめる

打聞あがたの説わろし

小野小町

わびぬれば身を浮草の根を絶てさうふ水あらばいなん
とぞ思ふ

○ワタシハモウウ。イツライ身デ。難義チ致シテチリマズレバ。浮草ノ根ガ
ナウテドナヘデモ水ノユク方ハサソハレテユクヤウニ誰デモサソウテ
クレル人がアラウ。ナラドツチヘナリトモ参ラウト存シマズル

題志らず

あはれてふとこううたて世の中を思ひはなれぬほだし
なりけれ

○人ノア、ハレオイトシヤト云テクレル詞ガ。ウタテヤ。世ノ中チ。エ思
ヒハナレスホダシヤワイ。タマ〜ニモサウ云テクレル人がアルト。
又下ウヤラ。ステルモ。残りオホウナツテ

打聞うたての説わろし

よみ人志らず

哀あはれてふその葉ごどにあはれかく露あはれハむかしをこふる涙あはれなりけ
り

○昔チ戀シウ思フテ。ア、ハレア、ハレト云フタビゴトニ涙カコボレル
スレバソノア、ハレア、ハレト云フ言ノ葉ハ草ノ葉ハオクヤウニオク
露ハ涙ヂヤワイ

よのなかのうきもつらきもつげなくにまづさる物ハ涙
なりけり

○世中ノウイコモツライコモ。云テキカセモセヌノニ。マヅ一番ニ知ルモ
ノハ涙ヂヤワイ

世の中ハ夢かうつゝか現とも夢とも志らずありてなけ
れば

あはれハあゝとなげ
さするなり

いつれは俗にぞれど
ここに云ほどの事な
り

小町集にハもののお
びしきとさきり則詠集
には物さびしかる
ハあれどハあり

○夢デアラウカ。正真ノコデアラウガ。ソウタイ世中ノコハミナ。アツテ
ナケレバ正真ノコデアハ夢デアハ。ドウモルレヌ
よの中にいづく我身の有てなしあはれとやいはんあな
うことやいはん

○世中ニドレドコニ我身ガアルガ。人ト云フモノハ明日死ナウモシレス
ガ。明日ニモ死チバデキニ埋ミカ焼カシテシマヘバ。此身ハアツテモ
ナイモノデヤ。ソレチ思フテ見レバ。アハレトイハウカ。ア、ウイトイ
ハウカ。サテモサテモ。人ノ身ハハカナイ物デヤ。餘材四の句をかもし
ろきものとやいはんと注したるはたがへり

山里ハ物のさびしきところあれ世のうきよりハ住よか
りけり

○山中ハ物ノサビシイコソワルケレ。ソレデモ世中ノウイノヨリハマ
シテ。住ヨウゴザルワイ

六帖にはよみ人しち
すさす

吹しくさは重岐のま
くにて吹かきなれる
意なり

これたかのみこ

まら雲の引峰にだにすめば住ぬる世にころあ
りけり

○雲ノフダンタナビク此ヤウナ。高山ノ峰デサヘ。スメバカウシテスンデ
トホル世中デゴザルワイ

ふるのいまみち

さりにけんきへてもいどへよの中ハ浪のさわぎにかぜ
ぞしくめる

○コレ世間ノ衆。知テ居ラル、デモアラウガモシ知ラシヤラズハ。今ワシ
ガ云テキカスチ。聞テナリ也。此世チバ早ウステサツ。シヤレ。テウド風
ガ吹チ浪ノサワガシウシキリニウチヨセテクル荒イ海ヘノヤウナ世ノ
中デア、ドウモ落付ヌアンドノナラヌヤウスチヤツヤ。○テ云フ句。風吹テ
るといふ意なるを。さしい難き故
に。風と浪とを。わけてハいるなり

うせい

いづくにか世をばいとはん心ころ野にも山にもまどふ
べうなれ

○世チステ、ドコニキ。住ウツ、タトヒ野ニスンダリ山ニスンダリ也。
ヤツハリ心ハ、マヨウテアラウト思ハル、ワイ

よみひとまらざ

世の中のみむかしよりや、はうかりけん我身ひとつのため
になれるか

○ヨノ中ハ昔シカラ此ノ通りニウイ世中デアツタガ。但シ又オレガ身ヒト
ツノタメニ此ノヤウニウイ世中ニナツタノカ。千秋云。二句やハ
は。たらやの意なり

よの中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色に出に
けん

○世間ノ人ガアノウヤト云テ世ノ中チイトウテ來テ住ム山ノ草木チヤト

やいもじいまもの誤
りなるか

卵の花ハ木なるを草
木とはすべてにかけ
ていへり

テヤアウイト云フ名ノ知花ガ此山ヘ咲タ

みよじの、山のあなたに宿もがなよのうき時の隠れが
にせん

○吉野山ハズイブンフカイ山デヤガ。オレガノヅミニハマタツノ吉野山
ノアチラニ家がホシイモノヂヤ世中ノウイ時ノヒツコミ所ニヒウニ

世にふれバうさころへまされみよしの、岩のかけ道ふ
みならしてん

○世間ニカウシテ居レバ次第ニウイツライ。コトバカリマシテツルニ。一
日モ早ウ。吉野ノ難所^{みなじよ}ノ山ノオクヘヒツコモラウツ。ヤ、くイヤナ世

ノ中チヤ
いかならんいはほの中にすまバかは世のうきとの間に
こぢらん

マノヤウナ深イ山ノ中ニスンダナラ。此ノ世間ノウイコガキコニテ。コ

のけ道は和名抄に隠
道よのかけみちと
よめりかけはしにて
けはしき道を云

住バかはらすまへハ
かにてハは助辞なり

まに／＼とは何にて
もうれに離る意なり

うけくはうきをた
る云なり

同類なるをもてこ
に入ぬ

ステアラウツ。すべてかやうに。いはほの山をいへる。みあたゝ岩の
立ぬぐれるよしにて。深き山の中をいふあり。まどは岩窟の内をいふに
いあらず。

あし引の山のまに／＼くくれなんうき世の中はあるか
ひもなく

○山ノオクヘドコマデナリヒカクレウツ。此ヤウナウイ世中ニ住デ居
ルセンモナイ

世の中のうけくにめきぬかく山のこのはにふれるゆき
やけなまじ

○世中ノウイコニアキハテタ。モウドコマデナリトモ國ユキツレニ。奥山
ヘカクレウカシラス

おなじもじなき歌 物の／＼のよしな

世のうきめ見ぬ山路へいらんにハ思ふ人ころほだし

家の集にハ世をうら
みて山寺にまかる人
につかはすとあり

なりける

○世ノ中ノウイコチ見モ。聞モセヌ山中ヘハイツテ。住ウト思フニハドウ
モ見ステラレヌ人がアツテ。ソレニツナガレルウイ

山のほうしのもとへつかはしける

凡河内躬恒

世をすて、山に入る人山よてもなほうき時はいづち行、
らん

○御坊様モ山ニオスマイヂヤガ。ソウタイ世ガウイト云テ。ステハシマウ
テ山ヘハイツタ人が山ニスンデモソレデモ。マダヤツパリ。ウイ時ニハ
ドチヘイソコチヤシリマセヌ

物ねもひける時いときなきこを見てよめる

今さらいまに何おひいづらん竹の子のふきうしまげきよと
ハきらいずや

毛詩に我生之初尙無
爲我生之後達此百福
尙無無福とむのぶか
し意がよかり

○此子ハマアイマサラナゼニ。生レテキタヲヤラ。何ニツケテモ此ノヤウ
ニウイコノ多イ世デヤトハシラヌカヤイ

題まらさ

よみ人まらさ

世にふれバ言の葉まげきくれ竹のうきふしごとよ鶯ぞ
なく

○世ニアレバ何ノカノト人ニイロク。ウイコチイハル、コガ多ウテヤ
ノ度ゴトニ千秋云。諸何ウをひすのよ
くにすなくといふ意なり。

木にもあらず草よもあらぬ竹のよにはしよ我身はなり
ぬべらん

ワシヤ木デモナイ草デモナイ竹ノヤウデ。ドチラハモツカヌ物ニナル
デアラウヤウニ思ハル、

ある人のいはくたかつのみこの歌なり

わが身からうきよの中と歎きつゝ人のためさへかなし

この歌もいかでかな
しかるらんといか
の詞を入れて聞くと

かるらん

○ナンジウナ身ハ。ツテくサテモウイ世中カナく。歎テ。ソシテ人ノ

タメニマデ世ノ中ガ悲シウ思フテヤラレルガ。此ヤウナ世中ノウイノ
ハ身カラノコデコソアレ。人ハソノヤウニモアルマイニ。ドウ云フデ

人ノタメニマデカナシウ思フテヤラ。ル、コヤラ餘材だがへり
れきのくに、ながされて侍けるときによめる

たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれにおどろへて海士の繩清濁たざいさ
りせんとハ

○遠イサナカヘ別レテ來テ居テ。此ヤウニオチアレテ。獵師共ノスルシゴ
トチマアセウトハ思フテカイ。思ヒモヨラナンダコデヤ

千秋云。ないたぎは繩たくりなり。清濁の繩なぞ。
長く打はへおきたるをたくりするわざをいへり

田村の御時にとにあたりて津の國のすまといふ

文徳天皇の御時につ
みありてながされし
といふ。文徳實録に
見えす

隠岐に配流の皇族の
部にあり
むなハ廣く都の外な
る國をいへり

ところにもり侍けるに宮のうちに侍ける人よ
 つかはしける
 在原行平朝臣
 わくらひにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶ
 とこたへよ

○京デ身カヲヲ誰モ問テクレル人ハアルマイケレト。モシモシセント問
 テクレル人モアツタラバ。身ハ須磨ノ浦デ海士ノスルシゴトヲシテ。キ
 ツウ難義ヲシテ居ルト云フテ下サレ

左近將監とけて侍ける時に女のとふらひにおこ
 せたりける返事によみてつかはしける

をのゝはるかぜ
 あまびこの音づれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたど
 る世に

○ワタシモ御聞及ビノトホリノ仕合せデ。タウツク致シテ。我身デハナ

とけては外官とて司
 をやめらるゝとたり

イカト存ズル時節ニカヤウニ御訪下サルレバ。今デハモウハヤ天人ノ
 御尋子下サレタヤウニサ。存シマヌル。サテく御深切ナヨウコソ御尋
 子下サレタ。あま彦とは。天上の人をいへり物がたりをもにこれかれ
 見えたり。餘材打聞に山彦と。かあじとて説たるは。かあはず。これの昔
 よりあやまりてまがれたるとも有しにや。集中貫之の長歌には。山ひと
 のことをあまびことよめり。但しかれのもし後にふと寫し誤れるはて
 もあらんか。そはいかにまれ。この歌は。山彦はあらず。かれにあすべ
 て思ひあやまるとあかれ。

つかとけて侍ける時よめる

平さだふん

うきよに門させりとも見はなくなにか我身のいで
 かけてにする

○オレハ門ヲサシテ出入セヌヤウニモ見エヌニナセニ我身ノタメニハウ

この司わけてとある
 は何の故といまらね
 ど過失ありてなるべ
 し

今の本にはどばかり
とあるは多しきほど
ばかりは同用をな
す詞なれば古本は
だにもとあるはよろ
しきなり

かけといはんは木の
もとといひて筑波山

イ世ノ中デ。得世ニ出ヌイ。初句は。四の句のさか下になつ
して見へし。さて出がてを。打聞に。籠居ることあるはわらうし。これは
官をかちるはつぎくになり出へき道をしつゝふまれば。出がてを
よめるあり。

ありはてぬ命まつまのほどばかりうきとまげく思はず
も哉

○イツマデモ生テ居ル命デハナイ。オツ、ケ死ヌルヲ待ツワツカノ間チ
ヤニセメテソノ間ナリトモ。ドウツ此、ヤウニツライ苦勞ノ多ウナイ
ヤウニツタイモノチヤ

みこの宮のたちはきに待るをみやづかいつかう
まつらすととけて侍けるによめる

みやぢのきよき

つくはねのこの本とにたちぞよる春のみやまのかけを

こひつゝ

はやま茂山まげけれ
ど君がみかけに増か
げもなくといふ歌を
もとうしてよめり

○筑波山ノキツウツゲツテアルヤウニ御メグミノ深イ春宮ノ御蔭チ。コ
ノ上ナガラドウツト頼ミ奉ツテハヒタヌラ其御所邊チオシタイヤシ
マヌル。餘材上の句の詠わろし

時なりける人のはかに時あくなりて歎くを見
てみづからのなげきもなくよろこびもなきを
おもひてよめる 清原ふかやぶ

光なき谷には春もよくなれば咲てとくちる物思ひもな
く

○日ノ光リアタラヌハ入口デハ。春モヨソノコデ。花ノサツコモナケレ
バソノカハリニ又早ウ花ガチツテ惜イ思ヒモナイ。ヤウナモノデ。オ
レガヤウニ本カラ花モサカヌ身ハ。人ノ今度ノヤウナ。歎キモノナケレ
バケツソコレモマシカヤ

恩光をもおもひがけ
ぬたさへなり

中とは月のあやまり
と見ゆ歌の心は月を
后宮にたとへたり

かれすは練の字の意

かつらに侍ける時に七條中宮とはせ給へりける
御返事にたてまつりける
伊勢

ひさかたの中におひたる里なればひかりをのみぞ頼む
べくなる

○コノ里ハ月ノ中ニハエテアルトカシマスル桂ノ里デゴザリマスレバ。
ヒタスラアナタ様ノ光リヲ。頼ミニハ致シマセウト存ジマスルヲク
シハ

后を。月にたとへ奉るあり。

きのとしさだがあはのすけにまかりける時にうま
のはなむけせんとしてけふといひひかくれりける時に
こゝかしてにまかりありきて夜ふくるまで見れど
りければつかはしける 　　なりひらの朝臣

今ぞ志るくるしきものと人またん里をばかれずとふべ

かりけり

○人チマツノハナンギナモノヂヤト云フチ。今日始メテ知リマシタ。コ
レナレバツウタイ。人チ待テ居ル所ハハブサヲチセズニ。早ウイテヤ
ルヘキコトデゴザルワイノ

これたかのみこのもとにまかりかよひけるをかし
らおろして小野といふところに侍けるに正月にと
ふらはんとてまかりたりけるにひねの山ふもとな
りけれバ雪いとふかゝりけりまひてかのむろにま
かりいたりてをがみけるにつれぐとしていと物
かなしくてかへりまうできてよみておくりける

わすれては夢かと思ふおもひきや雪ふみ分て君を見
るとは

○深イ雪チフミ分テ。トホイ山里へ参ツテ。君ニ御目ニカ、リマセウト

にて俗に絶すといふ
におなじ此歌は朝と
の口ぶりにて人の及
ぶべきにあらず

わすれてはの詞まて
とにさるべくおぼゆ
いせ物がたりには日
くれにかへるとよ
めると作りかへたれ
ば心かはれり

ハ存シマシタカイ。存シモヨリマセナンダゴザリマスソナタハ御籠リナサレタフチフトウズレテハ。コレハマア夢デハナカツタカトモ。存シマスル

深草の里さとのすみ侍りて京へまうでくとてうこなりける人よみておくりける

年をへてすみこし里さとをいでいなばいと深草野とやなりなん

○年久シウ住ミキタツタ。此里さとチチイデ、インダナラ。タハサハ深草ノ里チヤニイヨクアレテ草ノフカイ野ニナルデガナゴザラウ。

かへし よみ人志らず

野のとならばうづらと鳴て年ハんかりにだにやは君はこころむ

○サイナア此里さとカ野ニナツタナラ。ワシハ鶴ト同マヤウニ泣テ月日チ

すへてうづらはあれ
たる野に住すまむの故に
あれたるをまころを
いはんとてはうづら
をよみあはせり

ダテマステ。ゴザラウニモウコレカラ。オマハハセメテチヨツトモ御出ナサルマイ御レウケンガエソレヤアンマリデゴザリマスツエ。かりには。うづらをかりにといふによせたり。

題志らず

我われを君きみなにはのうらに有しかばうきめをみつのあまとなりなき

○オマハガ。ウタシチナンデモナイモノニナサツテ。ウイメニアフタニニ。ソレデワタシハ此難波ノ三津寺へ参ツテ尼ニナリマシタ。難波浦三津。海本。海士にてしたてたり。

此歌はある人。むかしをことありけるをうまのををことはず。ありにければ。難波のみつの寺にまかりてあまにありてよみてををことにつかはせりけるとあらいへる。

かへし

此注後人の筆にて云
にたらねばとらす

なにはがたからむべきまもおもほえずらつこきみつの
あまとかはなる

ワシハソノヤウニソナタニ恨ミラル、ヤウナナンニモ覺エハナイニ何
チマアソソクニ思フテ厄ニハナリヤツタゾイ。浦を見るべき間もま
にいつれのところを見たぞとらへるをもてまたてるあり。間とらひら
づととらへるに心をつくべし。さてその間とらひ。らつこきとらへるはた
々詞のまたての方のみにて歌の意にはあらすこのところをよくわきま
へずはまざるべし。歌の意は恨みらるべきともおほえず。何事をうら
みてといふ意あり。

今さらにとふべき人もおもほえず八重むぐらして門を
せりて

○子供ヨアレ案内ガアル。カウ云テヤレ。今ニナリマシテ御尋下サレサ
ウナ御方ハオボエガゴザラヌ。此方ノ内ハインヘモシゲツタ葎デトヂ

てはさしこむつ
あつこ

此歌拾遺集に再び入
りて戀の部なり

テ門チサレテゴザルニヨソテマケラレマセヌ上ニテイナセヨ

此歌は。右の返しのともしはあらす。別歌あり。

友達の久しうまうでこざりけるもとによみてつ
かはしける みつね

水のおもにさふるまつきのうき草にうきとあれや根を
絶てこぬ

○因ナンツ此ノ方チ。ソソクニ思召ヌーガゴザルカシテチカゴロハト
ント打絶テ御出ガゴザラヌ。ケシカラスオミカギリデゴザル。千歌云。
結在根を
といへるはたい上のうきくさの
縁にて歌の心にはあつからず。

人をとばで久しう有けるをりにあひうらみけれ
ひよめる

あひは。一本にあひてとあるぞよろこがるべき
身をすて、ゆきやしにけん思ふよりほりなるものはこ

あれやはありてやを
ついで

万葉に時鳥なく岡の
への卯花のうきとあれ
れや君がたまさぬ

古本あひてうらみけ
ればよめる

ある説に思ふより外
なくといはんとて身
をすてて我心はりに

やしづらんといへり
どかく給れて思ひな
がらとむらふとなり
しなりをれを本意に
あらぬよしにいへり
と之は古本のほし書
にかなへり

ろなりけり

○オウラミ御尤デゴザル拙者モナニカト揚ユリミナイトトリマギレテ。存
ナガラ。久シウ心外ニ御沙汰ヲ致シタ。我身ナガラ心ニ思フヤウニハ
ナラヌモノデゴザルワイ。身ハ我身ナレバドウナリト我心シダイニナ
ルハズデゴザルニ心ニ思フヤウニナラヌノハ。ワシガ心ハ。身ヲバ捨
テオイテヨソヘインデシマウノ。心ト身トガ別々ニナツタカハけんマリマセ
ヌ。餘材よろし打聞わろし。下句は心におもより外ある物は。身あり
けりといふ意あるを。さはいひがたき故に。心ありけりとはいへるあ
り。

むねきかのおほよりがこしの國よりまうできたり
ける時に雪のふりけるを見ておのがおもひはこの
雪のごとくなんつもれるといひけるをりによめる
君が思ひ雪はろもらへ頼まれず春より後はあらじとお

もへは

○貴様ノ思ヒガ雪ノヤウニツモツタナラ。ソレヤドウモ頼ミニナリマセ
ヌナゼトヤヌニ。ソレナラ春カラハモウサウハアルマイト存ズレバサッ
雪ハ春ニナレハミナ消マヌツヤ

かへし

宗岳大頼

きみきのみ思ひこしぢのまら山はいつかハ雪のきゆる
とさめる

○イヤ〜サウデハゴザラヌ。貴様ノフバツカリ思ウテ。ワシガ來タ北
國海道ノ白山ハ。イツ々雪ノ消ル時ガゴザルゾイ。御聞及ビデモアラ
ウガ。白山ノ雪ハ春デモイツデモキエハ致サヌ。ワシガ思ヒモンノ通り
デゴザルツヤ

こしなりける人につかはしける

きのしづら

おもひこしぢとは思
ひつゝゝるとなり

昔のこしのまらねの
一夜もゆめのとまに
よろしき歌

菅原の伏見は大和國
添下郡なり次の歌
を三輪の神の歌なり
と云説よりこの歌を
仙人のよめるなど傳
とあれどとるにたら
ず

六帖にはこれを三輪
の大神の御歌とす古
來風体抄に初の句わ

れもひやるこしのまら山まらねども一よも夢にこねぬ
夜ぞなき

○君ノコトヲ思フテ常住我が心ハ北國へ通ヒマス。ソレテ白山トイフ所
モドソナトコロカシラチドモ。毎夜心ガカヨウニヨツテ。ソノ白山ヲ夢
ニコエヌ夜ハ一夜モゴザラヌ。

題志らず

よみ人志らず

いざこゝに我世はへなん夢原やふしみの里のあれまく
もをさし

○モウレウケンチキハマテ。ワガ一生ハ此ノ伏見ノ里ニ住ミハテウツ。オ
レガモシヨソヘ移ツテイソダナラバ。コノ家ガアレテシマウテアラウ
ソレハマアイカニシテモ残念ナリギヤ
わがいはみわの山本戀しくいとふらひきませ杉たて
るかど

○ワシガ内ハ。三輪ノ山ノ麓チヤ。逢タクハ尋テテ御ヒナサレ杉ノ立テ
アル門ガンデゴザラヌ

きせん法師

わが庵は都のたつみまろぞすむよさうぢ山と人はいふ
らん

○ワガ庵室ハ京カラ辰巳ノ方遠カラヌ宇治山ト云處チヤ。外ノ人ハ此ノ
山ニ住デミテモ。京ガ近イコエヤツパリ世ノウイフガアツテドウモス
マレヌ山チヤト云チヤガ。拙僧ハコレ此通りニ年久シク住テ居ル。
餘材に他人は山の名を。うぢ山とあつてといへるたがへり。打聞もわ
ろし。さて都のたつみまろといへるは。京の遠からぬよこにいへる詞を
るに。むかしよりそのころを得たる人をき故に。この詞いたづらに
り。また四の句をもたしかにときえとるあり。四の句は京近き故にあは
世のうきとのある山。といふ意にいひかけたるあり。千秋云。譯にドウモス
マレヌとある詞よをう

が宿はと見えては
みわの大明神の御歌
とせすとより何をか
よりととるとしてか
くはまるとされけん

ちといへる詞の勢
ひにあたり。

よみ人志らず

あれにけりあはれいくよのやどなれや住ける人のおど
づれもせぬ

○コノ家ハアハレキツウアレタワイ。此ヤウニシテ何年ニマアナル。家
ナレバ昔シ住ンダ人ノ音ヅレモセヌツ。サダメテ住ンダ人ハアツタデ
アラウニ

ならへまかりける時にあれたる家に女の琴ひき
けるをきよてよみていれたりける

よしみねのむねさだ

わび人の住べきやど、見るなべよ歎きくはゝる琴の音
ぞする

○此ノ家ハナンマフナ人ノ住ムヤウナ家チヤガト見レバ。ソレニツレテ

六帖には作者伊せと
あり

在俗の時の歌なれば
名をばかくかけるな
り」なべは並の意な
り俗にうれにつきて
の意なり

又ソノ歎キノソツノ音ガヌル

はつせにまうづる道にならの京よやどれりける

二條

人ふるす里さいとひてこしかどもなちの都もうき名な
りけり

○京ハ人ノツシチワルイモノニシテ見ステタ所チヤニヨツテ。イマニ思
フテ出テキタケレ也。此奈良ノ都ニフルサト、云ナレバ。同ツクフルイ
モノニ思ハレケツライ名チヤワイ

よみ人志らず

よの中はいづれかごとてわがならんゆきとまるをぞ宿
と定むる

○モノゴト定メナイ此ノ世ノ中デハ。イツクノドノ家が。コレツト云テ。定
マツタワガ家デアラウケ定マツタハナイドコデアラウカ。イキトマ

ある人云これは人に
ふるされたりしとき
なるべしもし女令人
の二條ならば延喜帝
のわすれさせ給へる
後のとニヤと

ツタ所チ。オレハ家ヂヤトシテ居ル
逢坂のあらしの風は寒けれどゆくも止らねわびつゝ
ぞぬる

○此、相坂山ハキツウ嵐フイテ。夜ルハ寒イケレドモ。所チカヘテドコヘ
イタト云テモ。サキガ又ドノヤウニアラウヤラシレチバ。ナンギナガラ
モ。シンバウシテコ、ニヤカウシテ。兼マヌル

風のうへにありか定めぬちりの身はゆくも止らずな
りぬべらん

○ドコト云、フナシニ風ニフキアゲラレテ。アルクナリノヤウナ。何ンデ
モナイ此、身ハテウドソノ座ノヤウニ。ユシサキハドコヘドウナツテ
ユカウヤラシレヌヤウニ思ハレル

家をうりてよめる

伊勢

飛鳥川ふちにもあらぬわが宿もせにわはりゆく物にぞ

九の三音ある抄に蟬
丸の歌なりといへり
より、ころもなきな
りとなり

ありける

○アスカ川淵コソ、瀬ニカハルモノヂヤト聞及テ居レ。ソノ飛鳥川ノ淵
デモナイワシガ家モ。不仕合セナ時セツニナレバ。瀬ニカハツテユクモ
ノヂヤワイ。瀬ニト云フノハ。ソレアノオアシノ、フツ。ガテンカエ

つくしに侍ける時にまうりかよひつゝ、さうちけ
る人のもとに京にかへりまうできてつかはしけ
る

ふるさとは見しこともあらずきのゝはのくちと所ぞ戀
しかりける

○京ハ故郷ナガラ久シブリデ。モドツテ見マスレバ。何トモキツウモヤウ
ガカハツテ先年ノヤウニモナウテ。シラス所へ参ッタヤウニゴザル。ソ
レ故貫様ト毎度基チ打テ。何トモ忘レテ面白ウソラシタ其ノ許ガ戀ウ
ゴザルワイナ

をのゝの折るとい
ふて唐土晋の王質が
故事なり

貞應本に袖のくすな
はが女とあり

女どもだちと物がりしてわかれて後につかはし
つかはしける

みちのく

あかざりし袖の中にや入にけんわがたましひのなきこ
ちする

○ワシガタマシヒハオノコリ多ウ存ジテ別レマシタ。オマヘノ袖ノ中ヘ
ハイツテ。アナタニトマツテアルガ存ジマセヌ。サウカシテ。アナタ
カラ歸リマシテカラ。トツトワシハオマヘノコバカリ思フテ。ウカノ
ト致シテ。タマシヒガコ、ニハナイヤウナコ、ロモチデゴザリマス

寛平御時にもろここのはうぐわんにめさせられて
侍ける時に東宮のさむらひにてさのこどもさけ
たうべけるついでによみ侍ける

ふぢはらのたぐふさ

もろここのはうぐわ
んは唐使の判官な
りけん唐使には大使
副使判官主典あり船
は黒にていたすなり

よ長竹はしのごも云
和名抄に長間等をよ
なが竹とよめり

なよ竹のよ長きうへに初しものおきぬて物を思ふころ

哉

○此節夜ハ長シ。竹ノウヘ、ハヤ初霜モオイテ。寒イニ寐モセズニオキ
テ居テ遠イ別レノモノ思ヒチスルコカナ。

此遣唐使は扶桑略記に。寛平六年八月廿一日にその詔ありしと見え
る度の事あるべし。

題志らず
よみ人志らず

風ふけバおきつゝ波たつた山よはにや君がひとりこ
ゆらん

○国アノ立田山チ。夜ガフケテカラ君ガタツタオヒトリ。コエテ御出ナ
サルデアアラウカサテノアンシラル、コカナ。立田山の事。打聞に。
ある人の書そへたる説よらし。但し立田川はかのれ別に考へあり。
の立田川の師の考玉がつかまの
一の巻。また二の巻に出たり

立田山は龍嶺とい
ふ所の山路やまど川
の北にうひて東へこ
ゆれば立川の立野と
いふ所なり

ある人の説は例の後
の人の物がたりによ
りて書くはへしもの
なり

ある人この歌はむかし大和國なりける人のむす
めにある人すみわたりける此女おやもなくなり
て家もわろくなりゆくあいだ此男かふちの國に
人をあひまりてかよひつゝかれやうにのみなりゆ
きけりさりけれどもつらげなるさしきも見はでか
ふちへいくごとどに男の心のごとくにしつゝいだし
やりければあやしとおもひてもしなきまにこと心
もやあるとうたがひて月のおもしろかりける夜か
ふちへいくまねにてせんざいの中にかくれて見け
れば夜ふくるまで琴をかきならしつゝうち歎きて
この歌をよみてねにければこれをきゝてうれより
又ほかへもまからずなりにけりどなんいひつたへ
たる

から衣はたつといは
ん冠なり

神代紀に〇みよの長
鳴鳥といふより神社
にはあるべき吉例な
り

誰みそぎゆふつげ鳥かゝら衣たつたの山にもしはへて
なく

〇此立田山ニ誰たかやま換かチシテハナシテオイタ。庭鳥チヤガ。サキカラヒキ
ツマイテ久シク鳴ク。木綿付鳥の説。餘材よろし。

忘るれん時きのべとぞばま千鳥ゆくもまらぬ路をま
ゞむる

〇人ハドウナラウヤラク目ニサキノシレスモノナレバ。後ニモシ人ニ忘
レラレタキニコレチ見テ思ヒダセト思フテ。此通りニモノチカイテ。
手跡チノコシテオキマヌ

貞觀の御時萬葉集はいつばかりつくれるぞとへは
せ給ひければよみて奉りける

ふんやのありすぎ

かみな月まぐれふりれけるならのはの名にたふ宮のふ

上は序なり
榮花ものがたりには

うたの御時とあり

万葉集の時代なにか
ありとながければこ
ゝにはいはず

鶴鳴つるなき九鳥こぐさニニ呼よび
天あまニニいいふととどり
てよめるなる入し

るごぞこれ

○五七コレハ奈良ノ宮ノ御時代古イ昔テゴザリマス。又ハ奈良ノ宮ノ御時
代ニ古歌ヲ集メタト申ス集ガサ。此これハ万葉集テゴザリマス。 ちらの葉
の名にかふとは。 稻いなの葉の名につきてあるといふ意にて。 すまはち奈
良といふとあり。 時たにふりかけるをばめづらし。

寛平ノ御時歌たてまつりけるついでに奉りける

大江ノ千里

あしたづのひとわくれて賜こゑは雲のうへまで聞ゆつ
がなむ

○世間ノ人々ハミナ立身致スニ。我レ一人オクレテ。エ立身モ致サズ歎イ
テナリマスチバ。 誰レモ上テ下サル人ハナイコカヤ。ドウツ此ノ様子
チ上かみヘ申シ傳ヘテ下くだサレガシ

ふぢはらのかちおん

春がすみは立いで、
といはんのみ

くばこもりて後の歌
なり山川は音といは
ん料にしてうれより
ハ尻といひなせりも
もしもハ大宮の冠こ
のがなるといひなれ
てホやがて大宮屋と
にいへり

人忘れず思ふ心ははるがすみたち出て君がめにも見え
なん

○人ニハイハズニ。我望ミ願フコノアル此ノ心ハドウツ春ノ霞ノヤウニク
チ出テ上ノ御目ニモ見エヨカシ。ソシタラ此ノ願望ノ叶フコモアラウニ
うためしける時よ奉るとておくに かきつけてた
てまつりける

伊勢

山川のれとにのみきくも、
よしも哉

○御前ノ御事ハモウタマ今デハ音ニバカリ。ウケタマハツテナリマシ
テ。ウチタニテ上あリマスルコモゴザリマセヌガ。ドウツマヘカタタ
カハ致シテナリマシタトホリノ身デ。今モ恋ツテ見マシタイコザヤト
存テマスル

書古今和歌集遠鏡卷之十八終

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十九

雑体

短歌

題しらき

よみ人志らき

是ハ戀の長歌なり六帖にもふるき長歌をあげられたれどそのみ古編云にあらすその京となりて弘仁のころなどの人の歌さまなるべし

かくなわはいにしへの唐菓子なり

あふことこの	まれなるいろに	おもひろめ	わが身いつねに
あまぐもの	はるゝときなく	ふじのねの	もぬつゝとどに <small>とどに</small>
おもへども	おふことかたし	なにしかも	人をうらみん
わたつみの	おきをふかめて	おもひてし	おもひり今は
いたづらに	なかぬべうなり	ゆくみづの	たゆる時なく
かくなはに	思ひみだれて	ふる雪の	けなげぬべく
おもへども	おまの身なれば <small>まの身なれば</small>	なほやま声	おもひりふかし
あし引の	山したみづの	こがくれて	たぎつ心を

こは序に萬葉集に入
らぬ古歌を奉しめ給
ふとありその奉る歌
の目するしなる詞を
よみつらねたる長う
たなりみづからのも
さいへるはわろし是
を目六とかけしはい
かにぞやなほ世やう
こころあらめ

たれにかも	あひかたらん	色にいでの	<small>めやしうやうに思はれるによつて</small> 人きりぬべみ
そみずめの	ゆふべになれば	ひとりゐて	<small>あはれいはいはれど</small> あはれくくと
歎きあまり	<small>せんかたまたまに</small> せんすべなみに	庭にいで、	たちやすらへば
去らたふの	衣のそでに	おくつゆの	けなげぬべく
おもへども	猶なげかれぬ	春がすみ	よそにも人に
あわれとおもへば			

ふるうた奉りし時のもくろくのその長歌た

ちはやぶる	かみの御代より	くれ竹の	よにもたらす
あま彦の	音羽のやまの	春がすみ	思ひみだれて
さみだれの	そらもどくろに	さよふけて	山ほとゝぎす
なくさどに	たれもねざめて	からにしき	たつたのやまの
もみぢばを	見てのみまのふ	神無月	まぐれくいて

つらゆき

これまでにて四季な
り
賀の部にあてゝ云し
世の人の戀の部にあ
つ
あかすして雑かに緒
なかねたり
ふぢころも準備なり
やちくき物の名雜の
上下なごなかねたり
おなしく撰者の撰集
なりて奉るにそへて
奉れるなりくはふる

冬の夜の	庭もはだれに	ふる雪の	猶さねかへり
としごどに	ときにつけつゝ	あはれてふ	ことをいひつゝ
君をのみ	千代にといはふ	世のひとの	おもひするがの
ふじのねの	もゆる思ひも	あかすして	わかるゝなみだ
ふぢころも	おれるこゝろも	やちくさの	言の葉ごどに
すへるさの	おほせかじこみ	まさくの	沖につくすと
いせの海の	浦のまはがひ	ひろひあつめ	どれりどすれど
玉の緒の	みじかさこゝろ	思ひあへず	なほあらたまの
年をへて	大宮にのみ	ひさかたの	ひるよるわかす
つかふとて	かへり見もせぬ	わがやどの	忍ぶ草おふる
いたまわらみ	ふるはる雨の	もりやまぬらん	

ふる歌よくはへて奉れるなが歌 壬生忠岑
くれ竹の よのふること なかりせば いかほのぬまの

はそふるに同ト
くれ竹いかほの沼と
もに冠辭なり

神仙傳に仙さなるく
すりを飲てその人飛
去しがなほあまりの
薬を庭におきしかば
雞トリが犬イヌが喰ひて雞
は天上に鳴き犬は雲
中に吠たりと立さを
とりてよめり

いかにして	おもふこころを	のばへまし	あわれむかし
ありきてふ	人まつこそい	うれしけれ	身のまもながら
言の葉を	あまつそらまで	きこむわけ	すゑの世までの
あど、なし	今もおほせの	くだれるい	ちりにつけとや
ちりの身に	つもれることを	といるらん	これをおもへば
いにしへも	くすりけがせる	けだもの、	雲にはうけん
こゝちして	ちのなさけも	おもほらす	ひとつこころぞ
はこらまき	かくのあれども	てるひかり	ちかさまりの
身なりしを	たれかり秋の	くるかたに	あざむき出て
みかきより	どのへもる身の	みかきもり	とこしくも
おもほらま	こゝのかさねの	中にてい	あらしの風も
きかざりさ	今の野山よ	ちかければ	春のかすみよ
たなびかれ	夏のうつせみ	なきくらし	秋の時雨よ

わかちげりきついで
てわかえと云

袖をか	冬 <small>ふゆ</small> のまもよ	せめらるゝ	かゝるわびしき
身ながらも	つもれる年を	まゐるせれば	いつゝのむつよ
なかまけり	これよそいれる	わたくしの	おいのかずさ
やよけれ <small>よひ</small>	身のいやくて	としたかき	ことにくるし
かくしつゝ	ながらの橋の	ながらへて	なみのうらよ
たつ涙の	なみのまわさや	おほしれん	さすがよいのち
をしけれ <small>ば</small>	こしの國なる	まらやまの	かしらゝまろく
なりぬども	おとこの灘の	音 <small>ね</small> よきく	おいたまなすの
くすりもか	君が八千代を	わかぬつゝ見た	
やよけれ <small>ば</small>	今の世の言 <small>こと</small> 物 <small>もの</small> の多 <small>おほ</small> きをよけい <small>ふ</small> も		
ふい	言なるべし。餘材 <small>あま</small> 引ける佛足石 <small>ほとけあし</small> の歌 <small>うた</small> の夜 <small>よ</small> 與 <small>よ</small> 都 <small>みやこ</small> もこれなり。よけいとい		
	ふい。やを畧 <small>りやく</small> けるなり。此 <small>こゝ</small> やよけれ <small>ば</small> を彌 <small>やま</small> 過 <small>り</small> ればといふ祝 <small>いわ</small> ひがとなり。		

戀の過るといふとあるふくもあらず。又打聞よる人ぞあつてあるも
はれず

君が代にあふ坂山のいはし水こがくれさりと思ひける
かな

カヤウナアヲガタイ。君ノ御世ニアフ時節モアルモノヲ。今マテハタ
マヒマスネ。ウヅモレテ居ルイトハツガリ思フヲイヨ。アハウナコ
ガナ

冬のなが歌

凡河内躬恒

ちのやぶる	神子月とや	けさよりの	くもりもあはす
うちまぐれ	紅葉ととも	ふるさとの	よこ野の山の
山わらしも	寒く日ごとよ	なりゆけの	玉のをとけて
こさちらし	あられみだれて	霜こほり	いやかたまれる
庭の面よ	むらく見ゆる	冬くさの	うへふふしへ

これハ反歌なり五言
あるがこれのみ反歌
あるもいふかして
萬葉に反歌をかきて
かへしうたさよむな
りかみの長歌のこ
るをつみとりて打反
してうたへるもの奇
れ
ふるさとをいにし
へ都のあまをいふそ
れよりたつして人の
住すなりにしとこる
又我むかし住し所を
も又旅より本國をさ
していふことなり
ぬ

えら雪の つもりくても あらたまの 年をあまたも
すぐしつるかな

七條の君うせ給ひけるのちによみける

伊勢

おきつなみ	あれのみまさる	宮のうち	年へてすみし
いせのあまも	船ながしたる	こゝちして	ようむかたなく
かなしきに	なみだのいろの	くれなゐの	われらがなかの
時雨よて	秋のもみぢと	ひとくひの	おのがちりい
わかれなば	頼むかけなく	なりはて	とまるものどの
花すゝき	君なき庭ふ	ひれたちて	空をまねかば
はつかりの	なきわたりつゝ	よそよこそ見ゆ	

旋頭歌

題しらす

よみ人あらず

ひさめぐりの年月を
へて色の中の人こ
さしく退散するを
いふなり

申すはもどあがめこ
となれどそはかろく
心得へし

名なれば名ならめ
やなり

うち渡すをちかた人に物まうすわれ。そのそこふしらく
さけるいなよの花ぞも

○ウチミツタス。アチノ方ノ人ニワシハトヒマシヨ。ソノソコニ咲テア
ル白イ花ハナンノ花デゴザルツマア。サテモ見事ナ花ヂヤ。打わたす
ハ。見わたすとなり。古歌の例みなまがり。

かへし

春はるされは野のべにまづさく見れどあかぬ花まひなとにた
ゞののるべき花の名あれや

○コレハ春ニナレバ。野ハニマツ。一番ガケニサツ花デ。見テモく見
アカヌ花デゴザルガ。其名ハ。何ンツツカハサレネバ。ドウモ申サレヌ
タ。申サヤウナヤスイ花ヂヤ。ゴザラス。へくへく

千代云。まひは。人にものを贈るせい。今語にいふまひにはつらさを。

題くらす

はつせ川はいさいに
しへより絶さるゆゑ
に即はつせ川を古河
さいへるなり

三かきの山といへる
ハ雨に笠のつかけな
り
君かさをばみかさを
いはん冠りなり

俳諧とはをかした
はれ言をいへり

はつせ川ふる川のべよ一本ある杉年しのをへてまたもあひ
見ん二もとある杉

○四年ガタツテ後ニモ重子テ。又御目ニカ、ラウ。上三句ハ。年をへて
の序まや。又稻掛大平がいはく。上の又といはん序なり。二本ある木の
岐またの意まつつけたるなり。

つらゆき

君がさすみかさの山のもみぢ葉の色かみを月づぐれの
雨あめのそめるなりけり

○三笠山ノ紅葉ノ色ハ。ドウシテアノヤウナ色ニナツタカト思ハバ。シ
グレノ雨カシミツイテ。染ツタノギヤワイ。そめるのろみたるといふ意
なり。俗言よろむるとをそめるといふとい異なり。

俳諧歌

題しらす

よみ人志らす

梅の花見よこそきつれうぐひすの人くといとひと
もせる

○梅花ヲ見ニキタノデコソアレ。ドウモフルコデハナイニナゼニヤラ。
鶯ガ人ガクル人ガクルト鳴テ。人ノ來ルヲイヤガツテ。マア居ル

素性法師

山吹の花いろころもぬしや誰とへどこたへもくちなし
よして

○此ノ山吹ノ花ノ色ノ衣ヘ。メシハ誰レヤトイヘドモ。ヘンジセヌ。山
吹ノ梔子ノ色デロガナイニヨツテサ

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくれればかほとゝぎす志ぞの田長を朝
かくよぶ

○ドレホドノ田ヲ作ルトテ時鳥ハアノヤウニ。シデノタチサチ毎朝く

六帖にくちなしのい
ろにころもはそめし
よりいはでこいらに
ものなこそおもへ

ヨブコツ

七月六日たなばたのころをよみける

藤原かねすけ

いつしかとまたく心をはぎにわけて天の川原とけふや
渡らん

○今日ハ六日ナレバ天ノ川ハ明日ワタルヤケレドモ牽牛ガ此ノイツ
カクト待チカテ居ル心チ。織女ニ見セウタメニ今日渡ラウカシラ
ヌ

人よ物を。かくとあらはし見するとを。古への語はぎよあぐといふと
のありしなるべし土佐日記よいへるもその意なり。この歌よてハ待わ
びたる心を見せため。七日は渡るべきを六日よわたらんといへる
なり。さて腰をかへげて渡るとをかねたり。右の如く見ざれば心をと
いへる詞聞へすよく味ふべし

待を延てまたくとい
ふそのまつ心いそぎ
に衣をはぎにわけて
また
かくといふこころを
ふくみたり

題しらす

凡河内躬恒

むつごきは相むつき
じむ詞なり

むつごともしらだつまかくに明ぬめりいづらひ秋の長し
てふよひ

○ムツゴトモマダ皆マデエイハヌノニ。ハヤ夜ガアケル様チヤ。秋ノ
夜ノ長イト云フハ。ドコガ長イツ

僧正遍昭

なまめきは物のまだ
さゝのはねを云それ
をあしき方にいへば
なま〜の心にいひ
まださゝのはぬわか
き人には色をふくみ
たるありさまにいふ
なり

秋の野はなまめきたてる女郎花あかかしく花もひ
と〜き

○秋ノ野ニアノヤウニ女郎花ガ大ゼイ。チヤラクヲト云テ立テ居ルガア
、ヤカマシヤアノヤウニ花ヤカナノモ。一トサカリノワツツガノ間ノ
チヤ。オツ、ケシボンデ。見苦シイ物コナルヲチヤミラズニア、

よと人しらす

秋くれバ野べにたゐるゝとをかへといづれの人かつま

人をつむとはたはむ
れて人の身をつまむ
なり

なり

で見るべき

○秋ニナレバ野ヘンニヲヤラツイテ居ル女郎花ヲ。來テ見ル人ハ。誰レデ
エ、ツメツテタハムレル。ツメツテ見ヌモノハナイ。つむひ花を摘むか
ねたり

秋ぎりのはれてくもれば女郎花はななのすがたぞ見へ
隠れする

○霞ガハレタリ。クモツタリスレバ。女郎花ノウツクシイ姿ガ見エヌリ
カクレタリスル。結句かくれのがもと清めてよむべし。餘材打聞ども
よわろし

花と見てをらんとすれば女郎花うたゝあるさまの名に
こそ有けれ

○女郎花ヲ花チヤト思フテ折ウトスレバ。女郎ト云名ハ。ヒョウナ名デ
コソアレドウモ。女郎ニ手ヲカケテ折ラレハスマイ。餘材打聞ども

名にとは女郎花と
なづけしをいへり

たゝあるの注かなはず。すべて雅言をどくよその本の意よのみかゝつ
らひていなかゝゝ物どほくして用たる意は違ふと多し歌よまに交よ
まれるの用ひたるやうを他の例ども引合せてよく考へてどくべきなり

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

わり原むねやな

秋風よほころびぬらじ藤はかますすりさせてふきり
くをなく

○藤袴ガ秋風テホコロビタサツデ。ソノホコロビヲ。ツクリサセく
云テ。キリトスガナク

あき春たんとしける日となりの家のかたより
風の雪を吹こしけるを見てるのとありへよとこ
つかひしける きよのらのふかやぶ

冬ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花のちりけ

きりくすはつゝか
させかふるほど
鳴もまにかくよめり
とじる聞なせるとも
あるまなきにあらず

六帖に末句花はさき
けるとあり

る

○マダ冬ナレド。モウ明日春ガタツ。今日デ。近イ春ノトナリチヤニヨツ
テ。サカヒノ垣ノ上カラ。ソノ春ノ花ガチツテクルワイ

題くらき

よみ人忘らず

いろのかみふりよし戀の神さびてたゝるよ我のいぞね
かねつる

○何ンデモ年久シウナレバ。神ノヤウニ性ガ八ルモノヂヤカ。オレガ戀
モ年久シウナツタニエ性ガ入ツテ。ソノ戀ガタ、ツテ。オレハサ夜ル
モエチムラヌ

枕よりわとより戀のせめくれればせんかたなみぞとこな
かをる

○オレハ夜ルチテ居ルノニ。枕ノ方カラモ跡ノ方カラモ。兩方カラ。シ
キリニ戀ト云鬼メガ。セメヨセラクルニヨツテ。アトヘモヨラレズサ

いそのかみは大和な
りそこに布留の社あ
りそのふるをふりに
しさいふはこわり
なし

神代紀に頭邊脚邊と
あれにてこゝも心得
べし

キハモヨラレズ。ドウモシヤウガナサコ。床ノヤン中ニサ。ギツト起
テ居ル

をる。臥すして座してゐるをいへり。かやうのをるは例みなさかり
なみの無みなり。涙の意なし打聞よ。戀を泥よなして云々どあるわ
るし。

戀しきがかたこそありときけたてれをれどもさきこゝ
ちをる。

○ドノヤウニ戀フスル人ノ形デモ。ヤツレナガラモホソリナガラモ。ソ
ノ身ハアルモノヤトコソキケ。ソレニオレハ。戀デ心ガ心デナケレ
ハ立テ非テモスワツテ非テモ。此ノ身體ガドウヤラ無イヤウナ心モチガ
スル

戀しきるかたどの。戀をする人の身體をいへるなり。なさこちする
の。わが身體のなさやうよおぼゆるなり。あるかなさかのこちしてな

あつてさるはたはふ
れてするわざなれは
戯れにうしろいへり

といへるよ同じ。たてをなれともといふも身體よつきていへるなり。こ
ゝろとつくべし。餘材打聞ども。上下のかけ合かならず。

わかぬやとこゝろとがてら逢見ねはたのふれにくさま
ぞぞ戀しき

○アハズニモ居ラルノモノカト。マメシテ見ガテラニ。アハズニ居レバ。
ソナナヤウタンノモヤテ見ラレヌホド。戀シウテ。ドウモ逢ズニ
ハ居ラレヌ

み、なしの山のくちをさしてえてしがな思ひの色の下ぞめ
よせん

○ア、耳無シ山ノ支子ガホシイモノヤ。戀ノ思ヒノ色ノ下染ニセウ
ニソレデ下染テマラ。忍フ思ヒヲ。耳無シテ人モエ聞クマイシ。口
ナシデ。人ニ云レモスマイホドニ。ソシテ思ヒト云ニヒノ字ガアルニ
ヨツテ緋ノ色ト云キヤ

山田のそほづの鳥に
田の子をばまじとお
ごうかしに立る人が
たなり

ふじのねの火にもえ
とつくなりむなし
けふりの何のかひな
くいたづらに立る思
ひのけふりなり

あし引の山田のうほづおのれさへ我ほこしらふうれり
しきこと

○山ノ田ノカマシヲ見ルヤウナ。汝サヘ。ソヤヲノツンテ逢ニタイトイフ。
サテモイヤラシイ。ユマツタヤ。一人をさやしめても。おのれとさふ
なり

打聞もあやしの我をさへとあるかなはず。

きのめのと

ふじのねのならぬ思ひにもえはもえ神にけだぬむを
しけふりを

○出来ニ戀ノ思ヒニムチノモエルノハ。キツウ苦シイケレドモ。ハテドウ
モセウイガナイ。モエルナタモエヨ。富士ノ山ノ神様サヘエ御消シ
ナサレイデ。シヤウヂウ思ヒノ烟ニモエキツキヤルモノヲ。人間ハソ
ノハズノイヂヤ

初句の四の句へつゝきて。ふじのねの神をさふとなり。

きのありとも

あひ見まくほしの數なくありながら人よつきなとま
ひこそまれ

○アヒタイト思フ心ハ腹一ツハイアリナガラモ。ソノ人ニアハレル手ガ、
リガナサニドウシタラヨカロカ。カウシタラヨカロカトイロくニ心
ガサマヨウワイ。ソレチ夜ルノ月ヤ星ノイコノ星ハタントアリナガラ
モ月カナイ故ニクワテ道ニマヨウト云フニシタノガ俳諧ゴテザル

小野小町

人よあひんつきのをきよの思ひおきてむねはまり火に
心やけとり

○思フ人ニアハレル歌付ノナイ夜ハ。ソノ人ヲ思フ思ヒガ火ノハシル
ヤウニ。ハシツテ胸ガモエテ寐スニ起テ居ル。二の句よの。夜のと

むねはしるど心の
さわをいふ走火わ
火の外へはねとぶを
いへり

ある本よろし。よもじのよを寫し誤れるなり。よて二三の句は。月のなき夜の月を思ひてといふ詞のまたてなり。又おきては熾熾をかねてはしり火どのいへり。餘材よかねてよりおもひおきてと注したるのひがとなりその意のなし。たゞ思ひておきて居るなり。

寛平御時きよらの宮の歌合の歌

藤原おきかせ

春がすみたを引、野へのわかなきもありみてしが人ものつむやと

○モシ思フ人ガツムカドウヂヤ。春ノ野ヘンノ若菜ニマアナツテ。ツマレテ見タイモノヂヤ。若菜ハ誰デモツムモノヂヤワサテ。ツマレテ見タイトハ。ツメラレテ見タイト云フヂヤツユ。若菜といへるを老たる人の若さを願ふ意よ見るのわろしその意のなし

題くら幸

一二の句のわかなきのおもふ野へのさまきいふのみさるるろくかざりてにむが姿のよろしきをわすれてこそわりがましくいふの後のよみくせなり

思へども猶うとまれば春がすみかへらぬ山のあらじと思へば

○ワシガ思フ人ハキツイ性ワルナレバ方々ヘカ、リアルイテ。テウド春ノカスミノドコノ山ヘモ。カ、ラヌ所ハナイヤウナモノデ。アラウト思へば。思ヒナガラモヤツハリ。ウトくシイ心モナガスル

平貞文

春の野のさげき草葉のつまこひよとび立雉のほろくとぞ鳴

○「一」オレハ女ヲ思フ思ヒガシゲウテ「四」ホロくトサ泣マス
上句の春の野の草葉のこくとさげき妻戀といふとなり草葉のつまこひよとびたるよ意のなし。打聞草のはしとあるのわろし

きのよしひと

秋の野よ妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞ

雉の聲のけんくと鳴故にきこしどもさぎすといふほろいハ飛立羽音なりされどこの歌ハ戀なれば我しげきつまこひになみたをほろくとおとして泣と云を誰によせていへばほろいとなくといふも嫌ひしな

鳴

○毎年く。秋ノ野デ。妻ノアリモセヌ鹿ガ。我戀ノカヒヨくトナナツ
 ガ。アレハドウシタ^{まそ}イギヤツ。妻ニアフタナラハコソ。戀ノカヒガア
 ルトハ鳴ウコナレ。妻ノナイノニ戀ノカヒヨト鳴ウハズハナイニ
 此歌下句のてよをばの事なすと切て右の意よ見べし。又詞の玉の緒二
 の巻の終よいへるも一つの見やうなり

みつね

蟬の羽のひとへにうすき夏衣なればよりなん物よやの
 わらぬ

○^二今コソ一向ニウスイ心ナレ ^三馴タラハユクくハ厚ウ我レニ思ヒ
 ヨツテ。來サウナモノテハナイカ。馴タラ大カヲヨツテ來サウナモノニ
 思ハレ。打聞よろし。餘材わるし。但しよりなんといへるの表の紙と
 よていへるのだがとせ

和心地だに紙なま
 よふきによるまよめ
 り

たのみね

ねのなハ、蕪菜なり
 ねなほといやが古名
 なりねのなほといふ
 ハ芹を根ざりと云が
 とぞく

かくれぬの下よりおふるねぬあいのねぬ名いたゞしく
 るないとひう

○マシヨニ寐サヘセズ。メツタニ名ハタチハスマイホドニ。随分忍レテ。
 オレが來ルハカリチハ。ソノヤウニイヤガラシヤルナイ
 よみ人しらす

とあらばおもいぬとやいひはてぬなぞよの中の玉だ
 すきなる

○トテモ逢フテクノヌクライナラ。イツソイヤチヤト云ヒ切テマハハヨ
 イニ。ナゼニイヤトモオ、^五ヒ云ヒキラズニヒツカ、ツテ居ルコソ。ア、
 世、中ト云モノハ。打聞とならばの説わるし。この哥のかけたるといふ
 とを玉だすきあらどのみいへるが俳諧なり。下よいでや心の大ぬさよ
 してといへるとおきたぐひなり

にいたすきのかくる
 にいひよせた

くまの山、阿河、曲
路、限なきによせた
り

六帖に、阿河の句今ハ
おもはじきあり

思ふてふ人のこころのくまごとには立かくれつゝ見るよ
こもがさ

○オレヲ思フ〜トイツテモ云人ノ心ノ内ヘツノ度ゴトニハイツテ隠
レテ居テ實ニ思フニチガヒナイガ。ウツデハナイカ。ヨツシヤウノ所
ヲ見トメテオモノギヤ

おもへども思はせとのこゝろなればいさや思はじおも
ふかひあじ

○コレホドニワシヲ思フケレドモ。ソノヲソノ人ハトカク思ハヌ〜ト
ハツカリ云ナレバ。イヤ〜コレカラモ思フマイヅ。思フテモソノカ
セガナイ

我をのみおもふといはゞあるべきをいさや心の大ぬこ
よとして

○思フ〜ト云ノモ。ワシハガリヲ思フノナレヤ。ソレデヨイガ。イヤ

心あきらかなりされ
て俳諧にあらず

モウ面白ウナイ。ソノ人ノ心ハ大麻デ。引手が多ケレバトウモ

我と思ふ人をおもひぬむくひにやわが思ふ人の我をお
もはぬ

○ワシヲ思ウテケレル人ヲ。コチカラワシガ思フテヤラヌ。ムクイカシ
テ。ワシガ思フ人が。ワシチヌスツキク思フテクレヌ

一本
ふかやぶ

おもひけん人をぞとも思はまじまじとやむくいなかり
けりやと

○マヘカタ誰ツオレヲ思フタ人がアツタデアラウ。ソノキニコチカラモ
ソノ人ヲ思フテヤレバ。ヨカッタニ。コチカラハ思ハナシタテ。ソノム

クイガキテ今オレガ思フ人がオレヲ思フテクレヌ。ア、アラソハレ
ヌイヤノ。ムクイト云フハナイカ。キツトアルチヤワイノ

一本
よみ人しらす

いで、行んさする人
のほなひれくせし

出わさいふ諺の有し
なるべし

六帖に二の句そめて
衣さめるわろし

馬をも牛をも放ちか
ふまは野飼といへり

いぞゆかん人どどめんよとなきよとありのかたよ
鼻もひぬかな

○出テイナウトスル人チ。ドウモ留ウシカタガナイニ。ドウツ今。近所隣
デタレナリトクサメラスレバヨイニ。エ、カウ云ツトキニハ。クサメ
ラスル人モナイフカナ

くれなるよそめし心も頼れき人をわくはうつるでふ
あり

○深ウ思フノモドウモ頼ミニハナラヌ。ソノ人ヲアイテクレバドノヤウ
ニ深カツタ心デモカハルヂヤ 紅灰けようつるをもて。詞をまて
たり。

いどひるゝわが身の春の駒おれや野がひがてらよ放ち
すてつる

○人ニキヲウル、ワシガ身ハ。春ノ駒カシテ。テウド春ノコロ駒チ。野

さかしら小賢良も
情なとも情出ともか
けり俗にかしこたて
かしこいげな云に
似たりさやぐの笹葉
なごのしも風にさ
やぐとおさするの
そよぐと云も鳴音
なりさわぐもさわ
ぐの音にてもに

飼ガテラニハナシテヤツテカマハズニオクヤウニ。ワシチ見ヌテ。
チカラカマハヌ

うぐひすのこぞのやどりのふるさとや我よ人のつれ
なかるらん

○ワシニ人ノナイノハ。二二フルイモノニシテシマウテノイカシラヌ
上二句の。たゞ詞のつゞきのみなり。打聞よふるすのこどくさるわ
ろし

さかしらよ夏の人はねさゝのはのさやぐ霜夜をわが獨
ぬる

○オレモ夏ノ間。タハイシヨサウニ。暑イニヨツテ。獨寝チスルト。人ナミ
ニ云テ。マキラカシテオケドモ。冬ニナツテ此、ヤウニ寒イ夜獨寝レノ
ハ。何トモ云ヒヤウガナイ

平中興

島おさなり

よしの山ハむかし
障者の住しころなり
さいふもおくふかき
山なればなり

逢事の今のはつかりなりぬれば夜深からぞいつきさか
りけり

○逢フモモウ今デハ。ハツクナエトニナツテ。夜ガフケテカラデナケ
レバ其サリヤクガデケヌワイ 三の句ぬればといふてよをり。廿日
ふなりぬれば。月のおそきよしの。詞のきたての方のみよれり。哥
の意よのあらず

左のおほらちやうちやん

もろことよしの山にこもるともおくれんと思ふ我
ならなくに

○吉野山ハ殊ノ外深山^{しんざん}チヤケレドモ。日本ノ吉野山ハオロカナ^ナ。タト
ヒソナタガ唐^{から}天竺ノ吉野山ノオクヘエモツタト云フテモ。我^{われ}ハソノ分
ニシテ跡ニ残ツテ。居ヤウトハ思ハメ。ドコマデモアトチシタウテオ
ツカケラ行ウト思ウ

なかま

雲はれぬあさまの山の淺ましや人のこゝろを見てこそ
やまめ

○何ツ氣ニ入ヌコガアツテ。ワシニ逢フヲ止ウト思フテナラ。コナノ
心ヲトツクト見定メテ。ソノ上ヘテコソヤメルナラ。止メタカヨイ。
雲ノカ、ツテアル山ノヤウナモノデ。コナノ心ハドウヂヤヤラ知シハ
スマイニ。カルクシウ逢フヲ。止メタノハマア。アマリケカラヌキ
モノツブレタコトヤノ人ハ我なりあなたのとよ見たるハ誤なり。餘
材結句。のてもじを濁る説ハハルし打聞あさましの説わろし。

いせ

難波あるながらの橋もつくるなり今ハ我身をなよした
とへん

○今マデハ何デモフルウナツテシマウ。ソモノヲバ。難波ノ長柄ノ橋ニタ

六帖うちみてもしる
しなればしなのな
るあさまの山のあさ
ましの身ハ
いせの海のちひろた
くなりくりかへし見
てこそくまぬ人の心
ハ

いせの集に長柄のは
しつくるなりとさ
てと詞あり是も盡る
と見るハしこの橋文

結の時よくちてその
後の作られしと物に
見えす

トヘタヂヤガ。ソノ長柄ノ橋モ。今度新シウ出来タヂヤ。スレヤ此ヤウ
ニ人ニアカレテ。舊イ物ニナツテマウタワシガ身ヲバ。モウ今デハ
何ニタトエウツ。ナンニモ譬ヘルモノモナイ

よと人しらす

まめなれどなよごりよけくてかるかやの亂れてあれど
あしけくもなし

○オレハ随分實體ニ堅ウ身ヲモツケレドモ。何ンノエイコアルゾ。ソ
レデモナンニモエイコハナイ。世間ノ人ハ尠ク蓋ノ乱レタヤウニ乱レ
テハウラツテ者モアレドソレデモサミワルエイコハナイ。スレヤ實體ニ
マシナムブンガンヂヤ

おきかせ

何かその名の立とのをしからんまりてまどふかわれひ
とりかえ

ある抄にくそわ源の
告がむすめなりとい
へり

糸のよるといふは
糸にひひよせしつ
はり針によせ過る
糸糸を針に著にいひ
よせたり

○ナンノソノ名ノタツコガラシカラウ。戀ヲスレバ名ガタツトマリナガ
ラ迷フノハ。オレヒトリカ。オレバカリヂヤナイ。皆サウヂヤ

いとこなりけるをよそよそへて人のいひければ

此詞書の意ハ。くそがいとこなる男の。くそを思ひてけさうするよし
を。ある人のまかしのとをまかしのつと。くそくそよいひければなり。
よそへての。よもあらぬとを。よなりと言依するなり。萬葉などよ例多
し。考へて知るべし。餘材。この詞書の意をわやまれるから。歌をもと
きわやまれり。

くそ

よそながら我身にいとよるといふたぐりつはりに
すくばかりなり

○ソシナコトハワシヤ夢ニモミラヌ。スレヤソノヤウニ。ワシガイト
コガ。ワシニ戀ヲスルヤウニ。ヨシナガラ云フ。ソレヤホムノ

あふと逢期なり

みつゝ月は片われな
るよりわれてさひひ
さてわりなく物と思
ふころかなさといはん
序なり
わりなくほことわり
なくの畧言なり又そ
れをわれてさのみい
ふはいよみつかした
る詞なり

人こふるよを重荷とになひもてあふごなきこそわひし
かりけれ

○重荷ヲニナウタヤウコヨエツナイ戀ヲシテ。ソレタイツアハレルト云
フ時節モナイハ。サテモ難儀ナコトコソアレ。梶かきと荷をよなふとをも
てしたてたり

よひのまよ出て入ぬるみか月のわれて物思ふころよも
有かな

○田コノゴロハマア。サテモくツリナイ物思ヒヲスルコトカナ
そへにとてとすればかくりかくすればあさいひしらす
あふふきるさね

○ドウシタカヨカラウカ。カウシタガヨカラウカト。レウケンノ定メニク
イコヲ。イロくニ思案シテ見テ。ヨイレウケンヲ一ツ思ヒツイテ。
サウチャト定メテ。ソノ通りニスレバ又一方ニサシツカエガアリ。又思

後撰に
よの中にしらね山
に身なくさも谷の心
やいはて思はん

こころはそとら
いらさひて彼此を
云ふ片方につきて云

案ヲカヘテシテ見レバ。又一方ニサシツカヘガアリ。トカク世ノ中ノ
コトハア、ドウモナラヌモノサヤ。一方ガヨケレバ一方ガワルウチ
三の句の下よとあり。さふとをくはへて心得べし。上よならひせて。
此詞をはふけるものなり。餘材わろし。但しうへての注よ。古今着聞集
を引たるに當れり。うの意なり

世の中のうき度ごとし身をなげばふかき谷こそ淺くな
りけれ

○世中ノウイ度ゴトニコレデハくト思フテ。人カ身ヲナゲヌナラ。死
骸ガオビタ、シウツモツテ。深イ谷ガサ淺ウナルテアラウト。此ヤウ
ニウイフ。多イヨノ中ナレバ

在原もとかた

よの中いかよくることおもふらんこらの人ようら
とらるれば

そらつとひて
よきふらもに多
ごとくなれり

やましきはつかし
きなり

はふるは物をなげ捨
るこせなり

○人コトニ世ノ中ハウイモノナヤムトミテ。恨ミレ。サウ數萬人ノ人
ニラミラレノコトナレバ世中殿ハサツヤメイワクニ思フテアラウ

よみ人しらせ

何をして身のいたづらに老ぬらん年のおもつんとそや
とせき

○オレハマア何ヲシテ此ノヤウニ年ヨツタヤラ。何ノモセズニ年ハツ
カリヨツテ身ニツモツタ齡ノ思フトコロカサハツカシイ

れまかせ

身のすてつ心をだにもはふるごとつひよつつかぬある
とあるべく

○トテモ立身ナドモエセネバ。此ノ身ハモウ無イモノニシテ居ルキヤガ
セメテハ心バカリナリトモ大切ニ持テ。ステコンシヤウコハナレマイ
ツシテシムウハドノヤウニナルゾト。見トケルヤウニサ

しら雪のともには
白雪の心の心よは
あらず白雪の徒とい
ふがはかいなるべし

せつと

さら雪のともは我身のふりぬれと心ひきえぬ物にぞ有
ける

○我身ハ此ノヤウニ年ガヨツタドコモカモ大ニチガウタレドモ。心ハク
ツラレヌモノデサ。ヤツハリ若イトキコカハラヌワイ

よみ人しらせ

うめの花咲ての後のとかれややすき物とのみ人のいふ
らん

○梅ノ花ノ咲テナツテシマウタ跡ヘナル實ハ酸イモノチヤガ。オレハン
ノ梅ノ實チヤラレテ。人ガダレデモオレヲハ。スキモノチヤク
云ハ酸を好色とてらる。

法皇よしがははははとまじたりける日なる山の

宇多上皇より西川は

かつら川なり

ましらの猿の久な
りからうたにも猿啼
三聲派沾袋又三聲
断ッ斷ッ

六帖にひさげの衣ぞ
とあり
暹昭の集を見るに未
の句麻のけさなりと
ありて曰今と同じ
されどかの集は正し
からぬ物のよしなり

かひにさげふとらふとを題よてよませ給うける

とつね

わびしうにましらな啼そ足引の山のかひあるけふにや
はわらぬ

○猿ヨ。ソ、ヤウニ難儀サウニアマリナクナイ。今日ハ此通りニ恭クモ
法皇様ノ御幸ガアツテ。此ノ山ノカウシテアルカヒガアルデハナイカア
リガタイ日ヤツヨ今日ハ

題しらす

よと人しらす

世をいとひこの本ごとけ立よりてたつふと染のゆさの
きぬなり

○此ノコロモハ。世ヲイトツテ。一所不住ノ僧ノ。イツデモトコナリトユキ
カ、ルニ木ノカゲヘ立ヨツテハ。帯ナドモトカズツインノマ、ア。寐
ル。五倍子染ノ麻ノ衣デエザル。うつふしとい。神代紀ハ全制どわ

又大和物がたりは大
かたつりとものみ
なれこれしたが
ひがたし

る全とおなじくて。うのまよて臥をいふまろねと云よおなじ。うつ
ひさよ臥よりあらず。又打聞よ。五倍子のうつろなる物なる。故よ。
たつふしといふとあるも。いとむるし至臥を五倍子よいひかけたるよ
てこそ。俳諧にありけれ

古今和歌集遠鏡卷之十九終

頭古今和歌集遠鏡卷之二十

大歌所御歌

おほきほひのうた

あたらしき年の初にかくしこそ千年をかねてたのしき
ぞつめ

○行木千年マデモ毎年トシノ始メニハ。此ノ通りニタノシイヲ存分ニ
シツクサウワイ。をへめい。終^{おへ}めにて極^{きま}むるなり。めのの時^{とき}。千年まで
もといはひて。かくの如くたのしきつみ木をつむといへるなり。

日本紀にいつかへまつらめ万代までよ

ふるきやまとまひの歌

ふるきやまかづらき山にふる雪のまなく時をく思はゆ
る哉

綴日本紀天平十四年
正月に大安殿に出御
ましくして諸臣に宴
を賜ひもせちの舞等
を奏してなほりて又
天の下の位ある人に
も諸司夫生にも宴を
給へる時にたまへる
なり
綴日本紀に入とあり
しを誤りしなり
ふるきやまといふこの
頃はずたはて他ノ歌
なうたひしか又うた

へきもあるが中に古
歌ありとぞしづいふ
か

ふりは風俗なり

われをあれといふわ
古云なりあさけは朝
明の畧なり

○「葛城山ハ冬ハ雪ノフヲマ問ト云フハナイガ。ソノ葛城山ノ雪ノ通りテ
ワシハイット云フイモナシニマヤウキウ君ノイガ思ハレテ。サテモ思レ
ルヒマノナイコナ

あふとふり

あふとより朝たちくればうねの野にたづぞ鳴る明ぬ
この夜の

○近江カラ今朝夜の内ニタツテクレバ。ウチノ野コニアレ鶴カナクワ
サア夜ハモウアケルツ

みづくもふり

みづくきの岡のやがたに妹とあれとねての朝けの霜の
ふりのも

○山城國ノ此ノ岡屋縣デ。妹トオレト寐テ夜ノアケタ今朝ノアノ霜ノフ
リヤウウイノマア。アノ霜ヲ見レバ。昨夜ハキツウヒエタサウナコチ

萬葉に高市の黒人が
猿の歌はその中の一
首なり

神樂をみあそびとは
樂を奏するを云なり
神あそびの時手にと
りて舞はやすそのミ
リ物の歌なり

ハ二人ネタデ。ソレホドヒエル夜ヤトモ思ハナンダニマア

水くさの。すべて岡の枕詞なり。例は考へあり。また古よ家を屋形とい
へるとさらよなし。打聞わろし。もしかの説のこどくひ。四の句ねてし
朝けなどあらでいかなぬことなり。千秋云みづくきの考へ。玉
つまにくはしく見ゆ。

あはつ山より

あはつ山うち出て見ればかさゆひの島こぎかへる棚生
しきぶね

○シハツ山カラズット出テ見レバコイテ歸ル小舟ガアレ。笠コヒノ島ノ
アマリヲユツツ

神あふびのうた

とりものゝ歌

神がきのとむろの山のさかき葉ハ神のまへに茂りあ
ひにけり

霜のたびやけとかれせぬ榊葉の立とかゆへき神のきね
かも

きねの。木根よて。すなはち榊のいへるあり。木を木根といふは萬葉よ。
草を草根とよめて哥多く。また岩を岩根。屋を屋根予を予根などいふ例
よて根の添たる言なり。されは神のきねの。神の木なり。まかるを拾遺
集貫之哥よ。あし引の山の榊葉とさひなる陰は榮ゆる神のきねかなと
よめるの。既よこの歌を、巫現のたと心得あやまりて。よめりとぞか
はゆる

まきもくのあむむの山の山人と人も見るがけ山かづら
せよ

打聞よ。見るがよを見てしがなよとあるのわろしがよの。他の例よたが
へり

み山にのあられふるらとやまあるまもきの葛色つま

六帖に初の句わか
こかきあるわ似つ
はしからぬ二となり

右の二首はつづらの

歌なり

正木のゆづらは眞葉
の結とふふこたにて
冬もかれねと十月の
ころ古葉のうつくし
く色づくものなるを
云

にけり

みちのくのあだちの眞弓我ひかは末さへよりこまのび
くよ

我がどの坂井の志とづ里遠と人しくまねはみ艸おひけ
り

ひるめのうた

さゝのくまひのくま川に駒とめてあはし水かへかけを
だに見ん

かへしものゝ歌

青柳のかた糸によりて鶯のぬふてふかさの梅のはな笠
眞金ふくきびの中山おひにせるほそ谷川の音のさやけ
さ

この歌の承和の御へのまきびの國の歌

さしはらの呂歌なり
くめのさら山ハ美作
國久米郡にある山な
り關のふぢ川は美の
國の不波の關にな
がる、川にてむか云
なるべし

かみ山を鏡になし
てよめる歌上に出づ

千秋云。おぼんべは。大昔の爾を。音便にん
さひのへき。濁る。上をんさいへはなり。

とまごかや久米のさら山さらくよわが名いたてむ方
代まで

これハ水のをの御べの美作國のうた

との國關のふぢ川たてずして君よつかへんよろづよ
まで

これハ元慶の御べのみのうた

君が世ハかぎりもあらじ長ばまのまごこの數ハよみ盡
とも

これハ仁和の御人のいせのうた

大ともの黒ぬこ

近江のやかゞとの山とたてたればかねてぞゆる君が
ちとせり

鏡ハ蓋を立てのする
ものなればたてばこ
いへり

これハ今上の御べのあふとの歌

東歌

とちのくのうた

あふくまと霧たちわたりわけぬとも君をいやらじまて
ほすべなし

○アノアツクマ川へ霜ガズウト立テ夜ガアケメリ也。君ヲバヤルマイツ。

イナセテ又見エルマデ待ツアヒダガドウモナラヌ

初二句いたゞ夜のあくるけしきのみなり。打聞。詞にかなはずもしかの
注の意ならむわたりわたりたれといはで聞かず。餘材も。あふくまを。
人は逢ふよせとらへるもわろし。

とちのくのうたとあれと鹽がまのうらく船の綱で
かなしも

○奥州ニハドコニモカシヨニモ面白イ所ハ多クアレドモ。中デモ此ハシホ

鹽がまの島所なり

是は國のかみ御鎮守
府將軍の狩などには
いでたる時よめるな
らんといへるまことに
しかるべし

竈ノ浦ヲアレ綱手ヲ引テニクアノケシキガドウモイヘタモノデハ
ナイ。オモシロイヲヂヤワマア

わがせこととみやこにやりて鹽がまのまぶきの島のまづ
ぞ戀しき

○コチノ人チ京ヘヤツテ。留守ギウ。イツモドラル、フヤラト。待
テ居レバサテモ戀シイ

をくろ崎まづのことまの人ならぬ都のつとよしきと
なまこ

○アノ黒崎ノヨツノ小島ガ人ナラハ京ヘノミヤゲニイザ来イトニフニイ
ツレテイナウモテノヲ。を黒崎のを。をばつせなをのをよて。黒崎と
云地ノ名ナリ。

とよふらひ御かごとまうせ宮城野の木の下露ハ雨よま
されり

あだし心は他心なり

いふまじの心は相換

れ御待衆ソレ御笠ト申シ上ケサツシヤレ。此、宮城野ノ木カラオチル露ハ
クシカラヌモノデ。雨ヨリモキツウ。ヌレマヌツ

もかえ川のほれべくだるい舟のいなにはあらずこの
月ばかり

○田イヤデハナイカ。コノ月中ハドウモナラヌ
のほれべくだるい。のぼるもあれば。くだるもあるをいふ。

君をおきてあだし心をわがもたば末のまづ山かみもこ
えなん

○ドウ云フガアツタト云テモ。オマヘラオイト。ワシハ外ハ心ヲウツ
フデハナイモシソナ心ヲワシガ待ツタラ。アノ末ノ松山ノウハチ。
浪ガコエルデアラウ。ソナコトハナイイリヂヤハサテ。末の松山と
ス。る。す。す。とらふとこ。の。松山なるべし。

とがみうた

國の余綾郡の海邊なり
いそなほ萬葉にはま
葉つむ笹のなごめら
さもよみて磯におふ
るわかめなどの事な
り

このものもかひ此
面被面にて萬葉に彼
も此面も云におな
じさてこの詞はつく
はねにかざる云は
誤なり

小よろぎの磯たちならこいうまつむらぎしぬらぎを沖
にとれ浪

○小ヨロギノ磯へ出テ居テ。磯葉ヲツムアノ子供ガ。アレノ浪ニエレキ
浪ヨコレヤ。ソノヤウニアノ子供ヲスラニナ。沖ノ方ニ折レヨ又ハ立
テコズニ沖ノ方ニ居レ。をれい。をれよよてもあるべし。又浪のたぢる
なごもいへば。居れよくもあるべし。

ひたち歌

つくひねのこのもかのもに陰のわれを君がとかけよま
す陰をなご

○筑波山ノアチラ。ウラニモコナラウラニモ。ホノカゲハオビタマハ
シゲウアレドモ。君ノ御蔭ニマサツタゲハナイ

つくひねの峯のもみぢいおちつもりあるもあらぬもあ
○此ノツクハ山ノ紅葉ノチツテ。ツモツタヲ見レバ。惜ウ大事ニ思ハル、

ガテウド。此ノ紅葉ヲ思フトホリニ。此ノ常陸ノ國ノ内ノ百姓ハ。ドレカ
レト云フヘマテナヤニコトノク。フビニ大切ニ思ハル、トヨマア。
上ノ句い。結句のかなしめといふべけれなる。たごへなり。さてきるもま
らぬもなべてといふ詞い。上ノ句の落葉のたごへの方へのあづからずこ
の所よくせずのまぎれぬべし。さて此ノ歌何人のいかあるとことをよめ
るより。さだかならざれい。結句の譯もそのさすともよりて。かひるべ
きを。今いさばらく。國ノ司の部内の民とわいれびたるとよどりて譯し
さるの京人の歌よてもその國は傳はりぬるい。その國の歌とせると。萬
の葉の東歌の中よも見へたり。餘材わろし。又打聞に男を思へるとよ
まかれたるい。いか。あしその意なら。四の句。これもかかれもなごい
かひもすべけれ也。まるもあらぬもなべてとい。あまりひろくしてひた
まけたり

かひうた

甲斐人の今も月の九
日なけくぬかさいへ
ハ心なけいれさいひ
つらん

がもや願ふ意なり
後にハがなどいへり

かひがねをさやよも見とがけいれなくよこほりにせる
さやの中山

○甲斐ガ嶺ヲハツキリト見タイモノサヤノ中山ガヨコホリニセ
テアルデツカヘテハツキリト見エヌ。ア、心ナイサヤノ中山サヤ

千秋。云四の句のふせるを願注に。一本にてせる。又一本にてせるともあるよし。へり。東歌
にて。心なもけいれさいへん。その同じくさま國詞なるへければ。右の二つの内を正しかる
べき。但し古言にふすきやるさいへれば。〇くせるこせ
るともに。〇せもじのやきうつしあやまれるにはめらぬか

甲斐が根をねこし山とし吹風を人にもかもやことつて
やらん

○峯ヲコトシ山ヲコトシ。甲斐ガ根ヲ吹テユエ風ヲドウツ人ヲシタイモ

ノサヤ。ナアノシタラ京ヘコトツケヲサヤラウニ。この哥も。京
より下り居る國の司などのよめるなるべし。願住よまたがふべし。上な
るみちのく哥よ。みやこのつとよ云々をどあるも。京人のとこそ聞ぬた
れ。餘材の説にかひがねをといへる。をもじよかなはず。又遠江も上な

此ノなふの浦には片
方にかかひて枝の生
ひたる梨の木ありけ
んを見てよめるなる
べし

寛平元年十一月廿一
日に賀茂の臨時の祭
をはじめ給ひ左近中
將藤原時平朝臣を御
使として藤原敏行に
あつまあそひの歌を
よませたまへり

る哥よよりていへるされ。此哥よりよしなし

いせうた

をふの浦にかたえさくおほひあるなしのなりもならき
もねてかたらん

○田ナルナラザルハトモカツモ。マアナンデアラウト。イツヨニ寐テハ

ナシラセウ。なるどり。父母などもゆるして。願ひれて夫婦となるとの。
成就するをいふ。

冬のかものまつりのうた 藤原敏行朝臣

ちりやふるかもものやしろの姫小松よろづよふとも色ハ
かばらむ

家々稱證本之本作書入以墨滅歌合別書之
卷第十 物名部

ひぐらし

つらゆき

この歌事なければ
そ再び拾遺集に今に
末の句月とよむなり
さありいづれにても
聞ゆ

そま人の宮木ひくらとあしひきの山清のやまびこよびと
よむなり

○袖人ガ材木ヲヒクサウナ。アレコタマカキツウヒヤイテ大セイノ人聲
ガスルワ

在郭公下空蟬上

かちおん

かけりても何をかたまのきても見んかうのほんほと成
おし物を

○死ンダ人ノ魂ガ。ソラヲ飛ンデ又カヘツテ来テモ。何チ見ヤウツ。何モ
見ルモノハナイ。ツブンノ死骸ハイヤテシマウテ灰ニナツタモノ

をかたまの木友則下

くれのおも

つらゆき

こと時とこひつゝをれば夕ぐれのおもかけにのみ見へ
わたるかな

僧尼令の集に五章ハ
一〇五二日興集な
とあり

その殿は忠仁卿の山
莊なりしこさなり元
慶三年の紀に見えた

○夕方ニナレバ。ア、今ゴロハ思フ人ノ来タツブンデヤガト。戀シク思
フテ居レバ。其人ガヒタスラ面影ニ見エテ。サテモ今コ、ヲアルクヤウ
ニ見エルトカナ

忍草利貞下

かきのゐる みやこごま

をのこごま

おきのゐて身とやくよりも悲しきみやこごまへの別
れありけり

○カラダヘ熾火ヲ居テ我身ヲヤクヨリモカナシイハ。京ト島ヘトノ別レ
チヤツイ。下句ハ。思フ人の。京より島と云ふと遠き國へゆく。わ
かれをいへるなるべし

からと清行下

そめどの わはた

あやもち

うきめをばよそめとのとぞのがれ行雲のわいたつ山の

リ

三代實録に元慶二年五月四日太上天皇清和院より和院と所へり栗田院へうつり給ふといふことどもて云なり

ふもどよ

○我ラハ今。世ノ中ノウイコヲハ。トントノカレテヨシヨ見テ雲ノフカイ山ノフモトニ引越テキキヤス。あつたつなり。深くたつなり。万葉二に。ふる雪のあつたふりどとあるも。ふかくなふりとなり。このと説あり。この歌のと。打勝のことく。促。染殿と栗田と。何の縁もなき地名なるを。つらねて題よしたるなり。かの清和天皇の御事ありしより。そのころよめるなるべし。されば左の注も。その意よて見れば。難なし。かのみかどの御事よよらざれば。染殿と栗田とつらねたることよしなし。

この歌の氷のとのとかどのそめどのよりあはたへうつりたまうける時よよめる 桂宮下

卷第十一

奥山の夢のふるのさふる雪の下

しのすゝきとて一様ほにいてぬがかりに云はあやまりなり

けふ人をとふる心ハ大井川ながるゝ水よおとらざりけり

○今日オレガ人ヲ戀シウ思フ心ハ。大井川ノ流レル水ニモオトラヌクラ井ヂヤワイ

わぎもことよあふ坂山のまのすゝきはよハ出ずもこひわたるかな

○田ヲシハ色ニモ詞ニモ出サスニ。心テハツカリマア戀シウフテクラヌサテモシソキナコトカナ

卷第十三

戀しくはまたふをおもへ紫の下

いぬがとのとこの山あるいぎや川いぎとこたへとわが名もらすな

○モシ人カ問タナラ。ソシナコトハドウチヤカシラヌト云チヤツ。必ズ我

采女さのみにてなにかしの采女さもなきはわらふに云ねことなり

これハ日本紀の允恭の御時天皇衣通姫を藤原の宮に住せ給へてさま／＼行幸あり

名チモラステハトイツ。打聞ハ萬葉の此歌をどかれたらやう。いたくたかへり、訓もたかへり、藥葉よあるり。いざとぞ寸許瀧我名告余よてこゝなるも同じ。意なり。さこそせわ。のたまへといふも同じ。

此、うたある人あめのかどのあふこのうねへよ給へると

かへし うねへのたてまつれる

山志なの音羽のたきのおとよだ一人の志るべくわがこひめやも

卷第十四

おもふてふとのはのとや秋をへて下

そとほりひめのひとりあてとかきとこひ奉りてわかせこがく／＼きよひなりと／＼のくものふるまひかねて志るこも

りて姫はるはすやらをうかひませるをしらでよませる小歌なり

是ハ萬葉にいとまあらバ拾ひにゆかん住の江の岸によるてふ戀すれ貝と云を忘草にかへことバもすこしづ／＼かへしのみにてまた／＼同歌なり

○コヨヒハ必ズ御出ガアラウト思ハル、夜チヤマレン、蛛、ス、一、デ、ウチヤト云、ガ、サキヘヨウシレルハママ。蛛をさ／＼が、といふハ蟹かに又似て小きよこなり

深養父戀しどいたがあづけけんとならる下

貫之

道しらばつとよゆかんすみの江の岸よあふてふ戀あすれぐさ

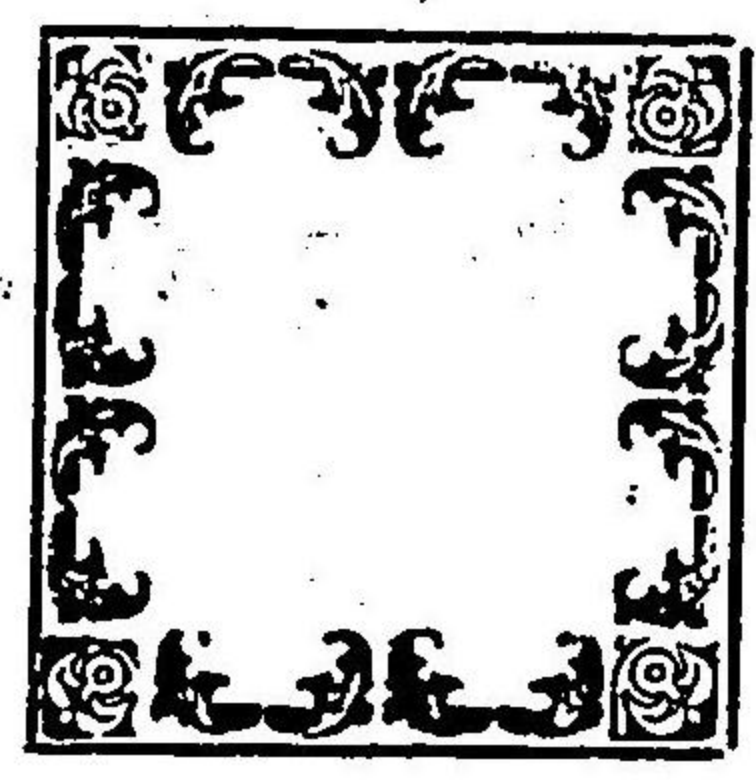
○道ヲシツテ居ルナラ、住ノ江ノ岸ニハマテマレト云、戀ヲワメ、忘草ヲツミニテモユカウ、貫之。萬葉の歌とおぼらせして。かゝるはるまじさよあらし。又おほらせして此集に入まじさよあらし。又貫之のよみくちよあらしといふもうけられず。すまじき歌いせせでとらへくわかるよあらしざるを。

本居宣長著
山崎久作頭書

頭書
古今和歌集遠鏡卷第二十 犬尾

明治二十五年二月十一日印刷
明治二十五年二月十二日出版

頭書古今和歌集遠鏡



發行者 梅原忠藏
大阪市東區備後町四丁目
三十一番屋敷

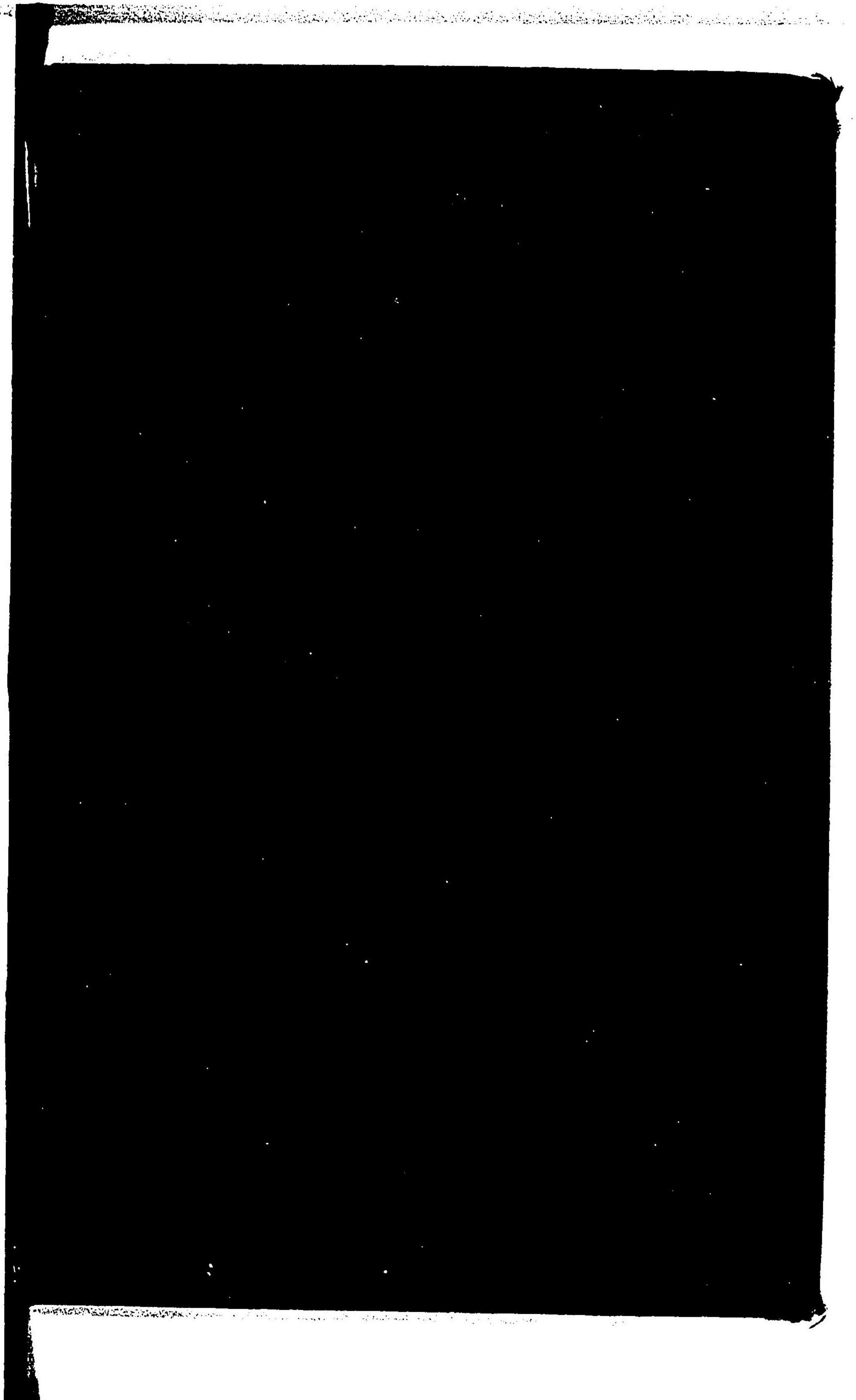
校正者 名倉熙三郎
大阪市東區南新町壹丁目
百六番屋敷

印刷者 前野茂久次
大阪市東區德井町二丁目
六十八番屋敷

大阪市東區北久太郎町四丁目
番外一番屋敷

發賣書肆
圖書出版會社

63
178



68

178

